

千葉教育

桜

令和6年度
No.691

千葉の子どもたちの未来のために

特集

学校・家庭・地域の連携

○シリーズ 現代の教育事情

県教育庁教育振興部生涯学習課学校・家庭・地域連携室	
県立九十九里高等学校 教諭	長井 敏彦
県立飯高特別支援学校 校長	渡辺 光治

○提言

株式会社キミカ 技術開発部リーダー	森 結花
-------------------	------



千葉県総合教育センター

学校自慢

伝統と未来を紡ぎ 次世代へ

県立匝瑳高等学校校長 しぶや 澁谷 よしのり 義範



1 100年の歴史

本年度、本校は創立100周年を迎え、同時に、進学先に合わせた系列や多様な科目を選択できる「進学を重視した総合学科」として新たなスタートを切った。



100周年記念式典の様子

2 匝瑳高校の強み

(1)進学先に合わせた系列

生徒は2年次から系列を選択する。系列には、文系科目のスペシャリストになれる「PEACHキャリア系列」、国際的な“架け橋”として活躍できる素養を学ぶ「国際ブリッジビルダー系列」、理数科の遺伝子を受け継いだ、科学のスペシャリストになれる「STEMキャリア系列」、文理融合領域に対応できる「360°キャリアビルダー系列」の4つがある。

(2)国際社会へ羽ばたくための土台



海外派遣時の発表の様子

国際ブリッジビルダー系列では英語以外に中・韓・フランス・スペイン語も学べる。また、全ての系列で希望できる、2週間のアメリカへの生徒海外派遣を実施している。この海外派遣においては、県立学校チャレンジ応援基金が活用され、派遣費用の補助が出る。

(3)匝瑳高校の「探究」

「産業社会と人間」等の探究科目で、地域と連携した探究活動を展開している。進路選択の際に生徒自身が「何をしたいのか」を語れるようになるために、多くの経験を重ねられる講座を実施する。

(4)文武両道を目指して

全日制の男子バスケット部は関東大会3位入賞、同じく弓道部と定時制のバドミントン部は全国大会に出場した。



バスケットボール部の活躍

3 地域とともに歩む匝瑳高校

令和7年度からスタートするコミュニティ・スクールでは、“探究活動”において、地域課題に学校と地域が連携して取り組む予定である。地域と共に発展できるよう、次の100年を見据え、海匝地区の教育をリードする体制を整えている。

◆学校自慢	伝統と未来を紡ぎ 次世代へ	県立匝瑳高等学校校長	湊谷 義範
◆提言	アルギン酸に魅せられて	株式会社キミカ 技術開発部リーダー	森 結花…2
シリーズ 現代の教育事情 学校・家庭・地域の連携			
■2040（令和22）年の地域をつくる学校・家庭・地域連携	県教育庁教育振興部生涯学習課学校・家庭・地域連携室…4		
■コミュニティ・スクールとしての実践	県立九十九里高等学校教諭	長井 敏彦…8	
■飯高のコミュニティ・スクール	県立飯高特別支援学校校長	渡辺 光治…10	
チーム学校の仲間たち			
■学校を創る	地域とともにある学校づくり～『地域と学校で育つ飯岡っ子』～	旭市立飯岡小学校校長	宇野 健一…12
■学校を支える	地域とともに未来を切り拓く生徒の育成～地域人材の活用から未来を考える取組～	東庄町立東庄中学校教頭	藤田 伸平…14
■学校を動かす	学校教育目標の達成のため、教務主任にできること ～「みんなで学び、みんなで励み、みんなで伸びる」チーム辰東の取組	市原市立辰巳台東小学校教諭	小丸 直也…16
■授業を創る	わくわくする理科授業を目指して	船橋市立船橋中学校教諭	井上 華恵…18
■授業を創る	「未来へつなぐ道德教育」を目指して	横芝光町立上堺小学校教諭	齊藤 優衣…20
長期研修生報告			
■令和5年度長期研修生の研究の紹介	令和5年度長期研修生…22		
■教職大学院研修生の研究の紹介	高等学校における情報活用能力の習得に関する生徒の意識調査	県立千葉西高等学校（前佐倉高等学校）教諭	久徳 郁美…25
ケーススタディ～Change the world～			
■タブレット端末を活用した教材づくりと授業実践（小学校2年生）	館山市立館山小学校教諭	黒政晋太郎…26	
情報アラカルト			
■既存の教科と教科「理数」の相互発展に関する研究（2年目／2年研究）	県総合教育センターカリキュラム開発部…28		
■小学校における自由研究（科学論文）の手引き作成に係る研究（2年目／2年研究）	県総合教育センターカリキュラム開発部科学技術教育班…29		
■不登校の子供の心身変化を的確に捉えた支援の在り方～子どもと親のサポートセンターの実践からみえてくるもの～	県子どもと親のサポートセンター教育相談部…30		
■「科学技術教育」のWebページ掲載について	県総合教育センターカリキュラム開発部科学技術教育班…32		
■令和7年度の研修事業等の紹介	県総合教育センター…33		
学校 NOW！			
■高校NOW！	【連載・県立高校の今】令和6年度 第6回 【解説と紹介】学科紹介③ 総合学科について	県教育庁企画管理部教育政策課高校改革推進室…36	
◆発信！特別支援教育	令和6年度調査研究事業 「特別支援教育における主体的・対話的で深い学びを実現するためのICT機器の利活用に関する研究」	県総合教育センター特別支援教育部…38	
◆千葉歴史の散歩道	海を望む古墳人と大寺山洞穴－古墳を築かなかった人々－	県教育庁教育振興部文化財発掘調査班文化財主事	小此木 遼

道 標

社会の急激な変化に伴い、学校を取り巻く課題は益々複雑化、多様化しており、それらの課題の解決にあたっては、学校だけの対応で解決することが難しいことが多く、家庭や地域との連携・協働が不可欠となっている。

本県では、第3期千葉県教育振興基本計画「次世代へ光り輝く『教育立県ちば』プラン」（令和2年2月策定。令和2年度からの5か年計画）の11の施策の中の一つに「家庭教育への支援と家庭・地域との連携・協働の推進」を掲げている。推進中の主な取組としては、(1)家庭教育支援プログラムや家庭教育支援チームなどを用いた家庭教育への支援、(2)学

校を核とした1000か所ミニ集会や地域学校協働本部、コミュニティ・スクールの導入など、家庭・地域と学校との協働による子供を育てる体制の構築、(3)関係機関との連携強化やきめ細かい相談支援体制の構築などによる、虐待などから子供を守る取組の充実・強化などがあげられる。各学校においても、チーム学校の機能を生かしながら、家庭や地域と連携・協働した様々な取組を進めているところであろう。

本号では、本県における学校・家庭・地域の連携の現状を振り返るとともに、今後の連携の在り方を展望したい。

アルギン酸に魅せられて

株式会社キミカ 技術開発部リーダー もり ゆいか 森 結花



1 はじめに（株式会社キミカとアルギン酸）

弊社は、現在国内で唯一、アルギン酸の製造販売をおこなっている会社です。1941年に千葉県君津郡（現在の富津市）で創業しました。海岸に打ち上げられた海藻を利用し、日本で初めてアルギン酸の工業生産に成功しました。アルギン酸は食物繊維の一種で、天然の海藻から抽出しています。現在、原料の海藻はチリから輸入しています。それも、生きた海藻を刈り取るのではなく、海岸に打ち上げられた海藻のみを使用するなど、環境に優しい製法でアルギン酸を製造しています。製造したアルギン酸は、食品や練り歯磨き、医薬品など、皆さんの身近なところに使っています。

2 入社の動機と職場環境

私は理科が好きで、物心ついた頃から理科を仕事につなげたいと思っていました。研究や開発をやりたいという思いで就職活動を進めていく中で、キミカを知りました。アルギン酸のことは、大学院生のときに行った小学生向けの理科実験教室の「人工イクラづくり」で知りました。しかし、キミカを知ることで、人工イクラをつくることしかできないと思っていたアルギン酸が、実はいろいろな分野に使われていることを知りました。「こんなに面白い素材を扱っているメーカーは他にはないだろうな」、「こういう珍しい素材をプロフェッショナルに扱っている会社で研究開発ができれば面白いだろうな」と思い志望しました。

職場では、先輩も後輩などの年齢に関係なく、コミュニケーションがとりやすいです。上司にも意見は伺いやすい環境で、非常に恵まれていると思います。新しいことに挑戦することが多いので、先輩からだけではなく、後輩からも意見を聞きながら前に進めていくことが多いです。みんなで自分の得意なところを持ち寄って何かを成し遂げていくということは、弊社がずっとやってきたことであり、本当に大事なことだと思います。

3 私の仕事

私は、アルギン酸を食品に使ってどのような効果が得られるかという応用開発のような業務を行っています。アルギン酸は、食品に用いられることが多く、例えば、パンに使うとふんわりと潰れにくいパンができたり、麺に使うとしっかりと食感を与えてくれたりします。アルギン酸にしかない特徴を活かして、食品の美味しさをもっとサポートすることができないか、検証しています。

今まで見えてこなかった効果が得られると、やりがいを感じます。お客様のところに伺って困りごとをご相談いただいた時に、得られた効果や情報などをお伝えすることでお客様に感謝されることがあります。そんなときは、やった甲斐があったなと思うし、今まで積み重ねてきた知識をちゃんと自分のものにしてきた意味があったなと感じます。

壁にはしょっちゅうぶつかります。すごく落ち込みますが、周りの人からの助けがあったり、ちょっと負けず嫌いな部分も出てきた



りして、何としてでも乗り越えよう、見返してやろうと考えています。先輩にアドバイスをもらったり、自分の理想とする人の姿から学んで改善していったりすることで、乗り越えています。

4 技術開発部リーダーとして

自身で開発業務を行いながら、食品開発を行うメンバーの業務を割り振ることや、新しい人がメンバーになってもできる限り理解できるように、自分だけが知っている知識や設備の扱い方などをできる限り資料化、共有しています。

日頃から気を配っていることは、ラボのメンバーが業務を回しやすいように気を付けたり、自分が後輩として言われる立場だったらどういう風に言われるのが良いかということ意識しながら、意見や注意をします。

私は、二級パン製造技能士の資格を取りました。大手の製パンメーカーさんと商談する機会がありますが、この資格を取得したことで、知識と技能のある技能士が試験をしているという弊社の姿勢を示すことができますし、今まで以上に説得力をもって説明することができるようになりました。

初めてリーダーという役職をいただいたときは、びっくりしました。思わず、「何で私がリーダーになるのですか？」と聞いてしまったほどです。しかし、上司が選んでくださったので、責任を持って取り組んでいます。

5 私のリケジョ（理系女子）へのあゆみ

小学生の時は、何にでも興味があり、興味が沸くとそれに集中してしまって、親に呼ばれても気づかないこともしばしばありました。小さい頃は親に科学館や愛知万博などに連れて行ってもらいました。当時は、メタンハイドレートという燃える氷が話題になっており、

私は、燃えないはずの氷が燃えるという現象が魔法みたいだなんて思って感動すると同時に、魔法みたいな力は科学というものを知れば分かるんだという思いも起こり、理科が好きになりました。勉強はそんなに得意ではなかったのですが、理科の授業で実験があるとすごく喜んで積極的に取り組んでいました。学校の図書室にある本や図鑑も大好きでした。教科書に載っている写真を眺めるのも好きでした。他の教科のテストが全然だめでも、理科のテストだけはいい点数をとっていました。たぶん、好きなことはとことんやるけれど、やりたくないことは避けて通ってきていたのかもしれません。その頃から、将来は理科に関わることを職業にしたいと思っていました。具体的にどのような職業があるのかは知らず、研究者になりたいぐらいの気持ちでした。

中学校時代は、放課後に理科の実験教室を開放していろいろなことを教えてくれる先生がいて刺激になりました。自分で手を動かして検証することが好きなので、研究の道に進みたいと思っていました。

6 千葉県の教職員の皆様へ

大人になればなるほど、学校の先生の業務は大変だなと感じています。

私は、「理科が好き」という私の思いを活かしてくださった学校の環境にすごく感謝しています。同じように、これからも子供たちが興味をもったものに対して、「いいね！」と言って応援してくださるような環境づくりをしていただけたら、すごく嬉しいです。よろしくお願いします。

神奈川県出身
大学院修了後、株式会社キミカに入社
小学5年生用副読本「マンガで学ぶ わたしたちの海～これまでも これからも とともに生きる～」にもインタビュー記事が掲載されています。

2040（令和22）年の地域をつくる 学校・家庭・地域連携

県教育庁教育振興部生涯学習課学校・家庭・地域連携室

1 はじめに

近年、社会情勢が大きく変化していく中でコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）を活用し、地域とともにある学校づくりを推進していくことが、有効なツールとして期待されている。2017（平成29）年3月に地教行法の一部改正に伴い、学校運営協議会の設置が教育委員会の努力義務となったことにより、千葉県を含めて、全国各地で設置が年々進んでいる。

本県では、2006（平成18）年に、習志野市が、県内初のコミュニティ・スクール導入自治体となった。県立学校では、2012（平成24）年に、多古高等学校及び長狭高等学校がコミュニティ・スクールを導入している。2024（令和6）年度、全県立学校160校中90校がコミュニティ・スクールとなり、設置率は56.3%である。市町村立学校の設置は、同年度、54市町村のうち35市町村で導入が進み、設置率は47.5%である。

本稿では、コミュニティ・スクール及び学校・家庭・地域の連携について、取組状況や課題について検討しながら、2040（令和22）年を見据えた学校・家庭・地域連携の在り方について考察したい。

2 コミュニティ・スクール（県立学校）

本県では、開かれた学校づくり委員会を県要綱に基づいて、2009（平成21）年に全県立学校に設置した。学校を地域に開くという目標のもと、地域住民に県立学校の教育活動を周知したり、学校への要望を聞いたりする等

の役割を果たしてきた。2012（平成24）年には、コミュニティ・スクールの在り方について先進的な研究を進めてきた多古高等学校、長狭高等学校に、開かれた学校づくり委員会に代わり、学校運営協議会を設置した。

学校運営協議会には、開かれた学校づくり委員会と異なり、以下の3つの役割がある。

- ①学校運営の基本方針の承認
- ②学校運営についての意見
- ③教職員の任用に関する意見

「学校運営の基本方針の承認」は、校長が策定した学校経営方針について、委員が承認を行う。ここでは、是か非かというより、学校と委員で一緒に取り組むことを前提とした承認となる。

「学校運営についての意見」は、教育活動や施設の改修等について、意見を通して、よりよい学校を作っていくことを狙いとしている。

「教職員の任用に関する意見」は、学校の現状を踏まえて、学校に必要な人員配置について、意見を述べるができる。但し、特定の個人を対象とした教員の配置等については、要望することはできない。

学校運営協議会と開かれた学校づくり委員会の違いとしては、参加する委員の身分の違いにある。学校運営協議会の委員は、地方公共団体の特別職の非常勤職員であり、学校運営に意見を述べるができる等、当事者として学校運営協議会に臨むことができる。従来の開かれた学校づくり委員が、第三者的に関わるのと大きく異なる。



2015（平成27）年には、浦安高等学校、2016（平成28）年には、さらに京葉高等学校に設置した。

その後、県立学校において、開かれた学校づくり委員会からコミュニティ・スクールに代わる学校が緩やかに増加し、大きな転換点となったのは、2022（令和4）年3月に文部科学省の「コミュニティ・スクールの在り方等に関する検討会議 最終まとめ」において、「教育長のリーダーシップの下、教育委員会が主体的・計画的に全ての学校への※CS（学校運営協議会）導入を加速」することが提言された。これを受けて、千葉県でも令和7年度までに、原則全ての県立学校に学校運営協議会を設置することとし、2023（令和5）年度には、前年22校であったコミュニティ・スクールは43校に増加した。2024（令和6）年度には90校まで増加し、設置率は、56.3%である。

2025年（令和7年）度には、全県立学校にコミュニティ・スクールが設置される見込みである。全国的に見ても、全ての県立学校にコミュニティ・スクールを設置している都道府県はまだ少なく、千葉県は、今後学校運営協議会の充実及び地域学校協働活動の一体的推進を図っていくことが重要である。

※CS（コミュニティ・スクールの略）

3 県立学校におけるコミュニティ・スクールの在り方について

従来の開かれた学校づくり委員会を学校運営協議会に置き換えただけでは、コミュニティ・スクールは形骸化していく。重要なのは、学校運営協議会の機能を活用して、地域学校協働活動を活発化させていくことである。

県立学校は、小中学校と違い、生徒が通学する学区が広く、さまざまな地域から多くの生徒が通っている。そのようなことから、コ

ミュニティの捉え方も、小中学校の学区や地域との連携が中心の「ローカルコミュニティ」ではなく、学校の特色や課題等に応じて関係機関等と協力し、課題解決を図る「テーマ・コミュニティ」として、地域の枠を越えた、より幅広い連携が求められる。

具体的には、社会に開かれた教育課程の実現を目指し、地域探究や防災活動が行われている。

各県立学校における地域学校協働活動については、千葉県庁中庁舎8階の生涯学習課の掲示板で紹介している他、県ホームページにおいても、各県立学校のページへのリンクを掲載しており、活動の取組を見ることができる。

今後は、各県立学校でそれぞれの学校の特色に応じた地域学校協働活動が実践され、それが地域の課題解決につながっていくことになっていくと想定される。



地域学校協働活動の紹介の掲示物



千葉県教育委員会のコミュニティ・スクールのページへの二次元コード

4 コミュニティ・スクール（市町村立学校）

2006（平成18）年度の習志野市での導入を皮切りに、2016（平成28）年度に市川市、2018（平成30）年度に睦沢町で、公立学校・幼稚園において全校導入が完了している。

2018（平成30）年6月、閣議決定された「第

3期教育振興基本計画」では、学校運営協議会制度の全公立学校への導入を目指すことが明記され、県内でも徐々に導入が進み、2022（令和4）年度までに、我孫子市、長生村、長南町、鴨川市で全校導入が完了している。

また、2022（令和4）年3月の「コミュニティ・スクールの在り方等に関する検討会議最終まとめ」では、地域と学校の連携・協働体制構築事業として、全校導入に向けた計画の策定が盛り込まれた補助要件が強化された。

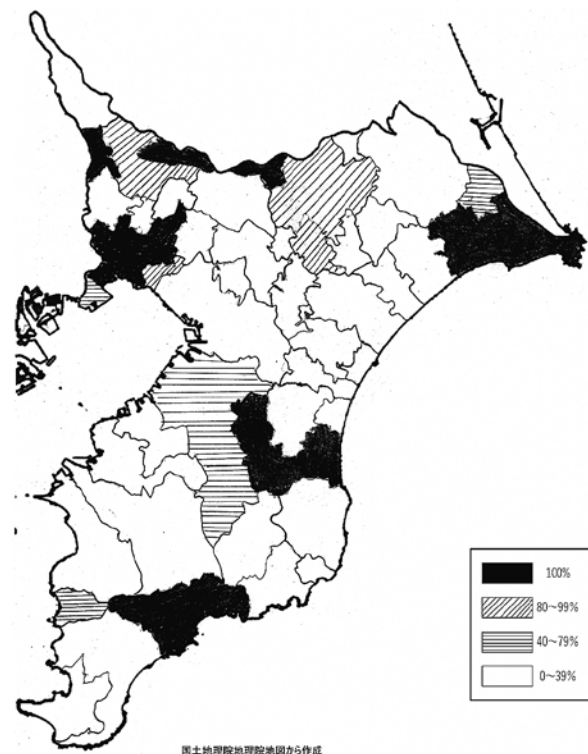
さらに、2023（令和5）年6月には「第4期教育振興基本計画」が閣議決定され、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進を図ることが明言された。

それらにより、2022（令和4）年度以降は加速度的に導入が進み、2023（令和5）年度には、銚子市、栄町で、2024（令和6）年度には、船橋市、流山市、旭市、一宮町、長柄町で全校導入が完了している。また、小中学校のみ（幼稚園を除く）に限れば、同年度現在、習志野市、浦安市、成田市、富里市、東庄町、鋸南町で導入が完了している。

文部科学省が実施した「令和6年度コミュニティ・スクール及び地域学校協働活動実施状況調査」の結果（公表値：調査基準日は2024（令和6）年5月1日時点）において、千葉県は、35市町村において、幼稚園6園、小学校318校、中学校149校、義務教育学校3校、市立高等学校3校、市立特別支援学校4校、計483校がコミュニティ・スクールを導入している。

段階的に導入を進めている市町では、導入完了年度を明確に決めているところも多い。未導入の市町においても、予算措置及び要綱の作成等に着手し、導入に向けた整備を進めている市町もある。今後、県内市町では、コミュニティ・スクールの導入が進み、設置率も増加していく見込みである。

千葉県市町村別コミュニティ・スクール導入状況（R6. 5. 1現在）



5 コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進

2024（令和6）年9月、県内全市町村を対象に実施した「千葉県コミュニティ・スクールの導入に関する調査」では、導入後の成果について以下のような回答が得られた。

- 子供たちの学びや体験活動が充実した
 - 地域人材を活用した教育活動が充実した
 - 地域の協力により教職員が子供と向き合う時間を確保できるようになった
 - 地域の中で子供を育てられている安心感ができた
 - 保護者同士や地域の人々との人間関係が構築できた
 - 学校や地域に対する理解が深まり、家庭教育等の相乗効果が生まれた
 - 学校を核とした地域ネットワークが形成され、地域の課題解決につながった
 - 地域の防犯防災体制等の構築ができた等
- 成果を得られている自治体では、地域学校



協働活動との一体的な取組が実践されていることが推察できる。

一方で、導入後の課題には次のような回答が挙がっている。

- ・窓口となる学校職員の負担軽減
- ・形骸化を改善するための手立て
- ・管理職以外の教職員や地域住民への周知及び理解
- ・人材発掘等

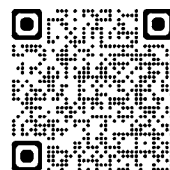
これらの課題への解決の糸口となるのが、文部科学省より2024（令和6）年9月に出された、「『令和の日本型学校教育』を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について（答申）」（2024（令和6）年8月27日中央教育審議会）を踏まえた取組の徹底等について（通知）」の内容にある。その通知の中では、地域住民・保護者との連携・協働の深化を図るため、学校における働き方改革について学校運営協議会等の場で積極的に議題として取り扱うよう取り組むこと、学校運営協議会の協議を踏まえた地域学校協働活動の充実を図ること等が明記されている。

その他にも、地域ぐるみの学校安全体制整備推進事業においては、「地域連携の場」の構築等、地域全体で見守る体制を強化するとしている。また、部活動の地域連携や地域スポーツ・文化クラブ活動移行に向けた環境の一体的な整備の事業内容（スポーツ庁・文化庁）の中で、体制整備においては地域学校協働活動推進等との連携の在り方について明記されている。

各自治体において、導入後に持続可能なコミュニティ・スクールとしていくためには、地域学校協働活動との一体的推進が必要不可欠であることが明白である。

柏市立土南部小学校コミュニティ・スクールのイメージ図

南部の子どもとして胸を張って次のステップへ！



千葉県ホームページ
二次元コード
地域とともにある学校づくり
推進支援事業（地域学校協働
活動・地域学校協働本部）

6 まとめ

コミュニティ・スクール導入状況等について、千葉県及び県内市町村の取組を紹介してきた。市町村においては、導入状況にばらつきがあるものの、理解が進み、着実に導入が進んでいる。

コミュニティ・スクールの目的は、「社会に開かれた教育課程」の実現である。単なる学校と地域の連携に留まることなく、地域人材を活用して、子供たちの学びを広げていくことが求められている。社会の変化が激しい時代だからこそ、学校と地域の連携をより密にして、開かれた学校づくりが必要である。

そのための仕組みとして、コミュニティ・スクールがある。今後も本県では、コミュニティ・スクールの導入を推進し、子供たちの学びのために、尽力していきたい。

コミュニティ・スクールとしての実践

県立九十九里高等学校教諭 ながい 長井 としひこ 敏彦



1 はじめに

本校は、山武郡九十九里町にある全日制普通科の高校で1学年3クラスの小規模校である。2年生から生活デザイン（服飾系）、生活デザイン（食物系）、ビジネス基礎（情報系）、進学コース（文系）、進学コース（理系）の5つのコース制による教育課程を展開する。

平成30年度にコミュニティ・スクールに指定され、活動している。

2 コミュニティ・スクールについて

コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）は、学校と地域住民等が力を合わせて学校の運営に取り組むことが可能となる「地域とともにある学校」への転換を図るための有効な仕組みである。

学校運営協議会の主な役割として、①校長が作成する学校運営方針を了承する。②学校運営に関する意見を教育委員会又は校長に述べることができる。③教職員の任用に関して、教育委員会規則に定める事項について、教育委員会に意見を述べるができる。という3つがある。（文部科学省ホームページより）

3 コミュニティ・スクール導入の経緯

平成28年度に、地域社会に主体的に貢献する態度や能力の育成を目指して、「コミュニティ・スクール研究校」に指定され、平成28年度、29年度に外部関係講師による校内研修を開催したり、各種研修会やフォーラム等に参加したりした。また、小中学校及び町の社

会福祉協議会、教育委員会と連携し、内容について調査、検討し、町の商工会及び役場関係者と連携し、キャリア教育推進のため、地域人材や企業の調査・分析を行った。そして、平成30年度より「コミュニティ・スクール指定校」となり、本格的な活動を始めた。

4 本校の活動について

本校の学校運営協議会の委員は、九十九里町の副町長や教育長、近隣の小中学校長、大学、商工会、社会福祉協議会の方々などを中心に構成されている。

1年間の活動は、5月に行われる第1回学校運営協議会で校長が学校運営方針などを説明し、学校運営協議会において承認される。その後、学校運営協議会は本校に対し、学習活動への支援や情報提供などを行える体制について協議を行う。毎年、総合的な探究の時間の特別授業の講師を紹介していただき、総合的な探究の時間において、九十九里町の歴史や観光資源などについて講演をしていただいている。また、今年度は近隣大学と連携し、保育や高齢者など福祉に関する授業も計画した。





10月には、本校が力を入れている環境美化活動にも、学校運営協議会委員が毎年参加し、町の清掃活動を生徒と一緒に行っていただいている。当日は、あわせて第2回の学校運営協議会を開催し、学校の課題などについて議論する。

11月は、本校の創立記念日があり、それにあわせ、令和3年度から、CSフォーラムという行事を行っている。この行事は学校運営協議会の方々に運営していただき、九十九里町観光大使の「かのんぷ♪」のお二人に講演をいただいている。中でも令和4年度は創立50周年ということもあり、生徒だけでなく、保護者、地域の方々にも参加していただいた。CSフォーラムでは、本校の活動を紹介し、茶道部や吹奏楽部などの文化部の発表を行っている。また、「かのんぷ♪」には音楽の授業でも外部講師としてウクレレの指導もしていただき、当日は本校生徒と一緒に演奏する場面も設けた。それから毎年、「かのんぷ♪」に講演をしていただいている。令和6年度は、事前に生徒からSNSを通して「かのんぷ♪」をお願いをして、ウクレレだけでなく、音楽とダンスのコラボレーションを行うことができた。



11月の九十九里町のふるさと祭には、本校JRC部を中心に多くの生徒がボランティアとして参加し、募金活動などの活動を行っている。また、第3回学校運営協議会では、本校

が抱える問題などについて意見を頂戴し、授業の様子などを見学していただいた。

12月には、九十九里町の高齢者が増加しているため、認知症について学び、支援できる人材になることを目指し、町役場や病院などの方々に講師としておいでいただき、認知症サポーター養成講座を行っている。

1月の第4回学校運営協議会では、学校の1年間の活動報告や、学校評価の外部評価をいただきながら、来年度に向けた取組について議論する。

それ以外にも、年間を通した活動として、町のスマホ教室のサポーターや手作りマスクを作成し、社会福祉協議会へ寄付を行うなどの活動をしている。

また、新型コロナウイルス感染症の流行前には、近隣の幼稚園や小学校との交流や福祉施設でのインターンシップや吹奏楽部によるコンサートなども行っていた。



5 まとめ

コミュニティ・スクールを導入したことで、地域の力を活かした教育活動ができるようになり、子供たちの健やかな成長のために、学校・家庭・地域の役割分担を明確化することで、学校が教育に集中できる環境を整えることができた。今後はさらに地域との連携を深め、生徒の成長を支えていきたい。

飯高のコミュニティ・スクール

県立飯高特別支援学校校長 わたなべ 渡辺 みつはる 光治



1 はじめに

本校は匝瑳市の北部、森に囲まれた自然豊かな地域にある。日本最古の大学と言われている「史跡飯高檀林跡」（飯高寺）が徒歩10分ほどの所にある。また、樹齢300年を超える「黄門桜」や県有形文化財の「飯高神社」、幹周りが10mを超える「安久山のスダジイ」と呼ばれるシイの木も近隣にある。これらは、これまで様々な映画やドラマのロケ地としても使用されている。

今年度、全校児童生徒は58名で、小学部から高等部まで設置されている知的障害特別支援学校では県で一番の小規模校である。早いもので、今年度、開校10周年を迎えた。135年の歴史を経て閉校した小学校の跡施設を活用して開校したので、開校前から地域の方の期待が高く、とても温かく受け入れていただいた。このようなこともあり、本校は開校当初から「地域と共に歩む学校」を目指し、「地域学校協働活動」の実践にも力を入れてきた。

2 本校の学校運営協議会について

地域と共に歩む学校としての自然な流れとして、令和元年度に学校運営協議会が設置され、本校は県内特別支援学校初のコミュニティ・スクールとなった。

学校運営協議会のメンバーは、今年度は校長も含め14名である。学識経験者や保護者、地域の区長会、社会福祉協議会、環境保全団体、小中高等学校、行政機関、福祉施設等の

各代表に参加していただいている。

年4回実施する会議の主な内容は、全体会では学校運営の基本方針の説明と承認、教職員の任用や施設設備に関する県への要望の説明と助言、保護者や教職員への学校評価アンケートの項目及び実施方法の検討や評価結果に対する学校関係者評価等を行っていただいている。



学校運営協議会全体会

会長（福祉関係者）の進行で全体会が行われる。



部会ごとの熟議

それぞれの役割・立場から、忌憚なく多くの意見が出される。

「学校運営部会」「学校支援部会」「地域連携部会」の各部会では、それぞれの所掌事項や学校の課題として捉えるテーマについても熟議していただいている。令和3年度は「地域、学校、お互いが求めること、できることは？～障害者スポーツを活用して～」、令和4年度は「地域と連携した防災活動と自分の命を自分で守る力を育成する防災教育の推進～命の大切さを考える防災教育公開事業を活用して～」、そして令和5年度及び令和6年度は「地域の教育資源を教育活動に活かした子供たちの学びに向けて～地域学校協働活動の充実を目指して～」について様々な御意見をいただいた。また、実際に委員の皆様にも

定例会議の他、運動会や樹望祭、学校・地域合同防災訓練、1000か所ミニ集会等に参加していただいている。中には、日常的に本校の地域学校協働活動に参加していただいている委員もいる。

3 地域の課題を教育資源に

開校当時、地域の方から「飯高地区は過疎化や高齢化が課題」というお話をよくお聞きした。そこで、地域の活性化につながるような「地域美化活動」「高齢者福祉活動」「地域防災活動」、そして、令和3年度からは「地域広報活動」の地域学校協働活動についても、生活単元学習や総合的な探究の時間として教育課程に位置付けて取り組んでいる。小学部は「地域を知る」、中学部は「地域とかかわる」、高等部は「地域を創る」を目標にして、一人一人のキャリア発達を目指している。



地域美化活動

学校周辺道路の清掃活動。その他、文化財や公園、高齢者福祉施設や店舗などの清掃も行っている。



高齢者福祉活動

七夕やクリスマスなどの飾りを作り、高齢者施設に届けている。利用者の方からの「上手だね。」の言葉に笑みがこぼれる。



地域防災活動

自主防災会や社会福祉協議会などの方々と行った「避難所開設訓練」。地域の方と防災について考える場となっている。



地域広報活動

地域の方に取材をして作成した「飯高寺ガイドマップ」。飯高寺の重要文化財の数々を紹介した。

4 これまでの成果

児童生徒への成果は、地域学校協働活動を継続的に進める中、地域の方から認められ、頼りにされ、「ありがとう」という心からの感謝の言葉を掛けていただくことで、友だちや教師以外の多様な人を意識し「自分は社会に貢献している」という自己有用感が高まり、主体的な姿に結びついていると実感していることである。

地域への成果は、学校を核とした一連の「協働」による取組により、地域コミュニティの意識が醸成されてきていることである。

また、学校への成果は、本校のコミュニティ・スクールの目的や意義を全教職員で共有し実践することで、同じベクトルで教育活動に取り組む教職員集団「チーム飯高」の形成に寄与していることと、何よりも、コミュニティ・スクールが、本校の学校教育目標「地域に学び、自分の良さを伸ばし、心豊かに、たくましく生きる児童生徒の育成」、そして、「児童生徒一人一人が、毎日登校することを心から楽しみにできる学校」の実現に向けて大きな役割を果たしていることである。

保護者や地域の理解と協力を得ることで地域教育力が向上する。そして、児童生徒の成長を実感することで、教職員にもやりがい生まれ、仕事へのモチベーションに繋がっていると感じている。

5 おわりに

本校の学校評価アンケートに「お子さんは地域での学習で役割を果たす力や自己肯定感を高めているか」の設問がある。今年度は肯定的評価が昨年度よりさらに増え、保護者、職員とも100%になった。本校の実践に対する一つの評価として捉え、今後の取組の糧としていきたい。



地域とともにある学校づくり ～『地域と学校で育つ飯岡っ子』～

旭市立飯岡小学校校長 宇野 けんいち

1 はじめに

本学区は、九十九里浜の最東北端に位置し、豊かな大地と海に恵まれた旭市の南東エリアにある。特に農業では千葉県を代表するメロン産地であり、また飯岡漁港は県内で上位の漁獲量を誇っている。本校は、校舎から雄大な太平洋を見渡せる九十九里浜の沿岸部に面した平坦地に立地し、海岸の堤防から校門まで約250m、海拔6.7m地点にあり、国内でも海岸からとても近い位置にある学校といえる。

2011年（平成23年）3月11日の東日本大震災では、大津波により多数の家屋が倒壊、人命が失われるなど、この旭市においても甚大な被害が発生した。被災当時は、学校の一部を避難所としてその年の5月末日まで開放し、3か月余り避難所としての機能を果たした経験をもつ。

2 コミュニティ・スクールの導入

今年度より旭市では、市内全小中学校20校でコミュニティ・スクール（学校運営協議会）と地域学校協働活動が導入された。

本校は昨年度まで市内のモデル校に指定されており、その実績をふまえ、今年度の学校経営のグランドデザインに、新たに『地域と学校で育つ飯岡っ子』をスローガンとした。

現在、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進は、本校の学校経営の「地域とともにある学校づくり」の重要な核となっている。

3 地域の人的・物的資源は学校の宝

地域人材や団体を生かした本校の教育実践について、代表的な実践を紹介していきたい。

(1)防災教育における「出前授業」

本校は震災を機に、より一層の地震・津波に関する防災教育の実践を重ねてきた。平成25年には、防災教育において千葉県知事表彰を受賞し、今日まで防災教育は本校の特色ある教育実践として受け継がれてきている。

この防災教育の縁あってか、令和6年7月5日（金）に、台湾台北市防災教育視察団（15名）の訪日において、旭市が視察地に選ばれ、旭市防災資料館と本校を訪問視察することとなった。そこで、公開授業では、ゲストティーチャーとして、有志団体「iii（トリプル・アイ）project」に出前授業を依頼した。

この団体は、震災当日、卒業式を直前に控えた中で被災した地元中学校出身者と市内の同学年の仲間達で結成したボランティア団体である。旭市内の小学校を中心に、被災体験を語り継ぐ防災教室を実施している。

この日の防災教室は、児童にわかりやすく当時の被災状況の伝承や手作りのハンドブックを活用した地震に関する防災クイズ、被災時に役立つ防災グッズ作り（ポリ袋で作るレインコート）の体験活動を展開した。この模様は、NHK 首都圏ニュースや千葉テレビ、複数の



出前授業での防災グッズ作り

新聞社等で報じられ、視察団の方々には大変好評であった。本校卒業生を活用した特色ある取組といえる。

(2)ふるさと教育における「出前授業」

ここ飯岡地区には、ふるさと教育で伝えていきたい地域の貴重な歴史的景観がある。

それは、飯岡海岸護岸工事竣工記念に建立されたアーチ状のモニュメントであり、このてっぺんには二人の少年が配置され、石を積み上げている姿がある。この少年達は、昭和7年に当時の本校第24代校長の鈴木保司氏（中村六三郎のペンネーム）が著した「我らの波止（はと）」に記されている。（詳細については飯岡小HPに掲載）

<http://www.edu.city.asahi.chiba.jp/es-iioka/wareranohato.pdf>

昭和初頭に当時の飯岡小の児童が、波の浸食の防波のために、海岸の「飯岡石」を毎日地道に運



飯岡海岸のモニュメント

び積み上げ、波止を築き、この献身的な活動が、飯岡小全校の取組へと広がり、さらに護岸に対する熱意が町、県を動かし、海岸整備事業への後押しとなった実話である。本校では、防災教育とふるさと教育の学習で毎年、飯岡地域の歴史に詳しい防災伝承語り部の方（旭市防災資料館職員）を出前授業に招き、郷土愛で苦難を撥ね退けた強い精神と防災への熱い思いを児童に伝えていただいている。

(3)人的・物的資源のネットワークづくり

本校では、地域資源（人材、自然、産業）を最大限活用した独自の取組がある。一つ目は、地元の産業を理解するキャリア教育とふるさと教育とを関連づけた海洋体験学習である。地元遊漁船組合の協力を得て、船上から

眺める刑部岬から屏風ヶ浦に至る壮観な地形と雄大に広がる海原と青空の美しい景色は、海に恵まれた郷土に誇りをもつ心を育むには最良の素材であり、また遊漁船での釣り体験により、海洋レジャーの魅力と海に関わる職業観を広げることにもつながった。

二つ目は、旭市小学校音楽会発表に向けた音楽の授業にあたり、地元在住の音楽家をコーディネーターとして外部講師に招いて、専門性と創意工夫を凝らした指導助言をいただいている。これら二つは、飯岡小ならではの学校自慢の活動であると自負している。



海洋体験学習



音楽会でハンドクラップ

4 おわりに

今年度の取組は、これらの他にも新たに、飯岡地区社会福祉協議会と連携した老人クラブとの地域交流会や生活科の「昔の遊びをしよう」での高齢者の方々との授業ボランティアでの交流、そして、地域づくりの児童参画の一つとして「認知症サポーター小学生養成講座」などを加え、実施している。

また、過年度から継続してきている町探検での市内企業の協力、飯小フェスティバルでの地域伝統文化の発表（地域住民と児童の共演によるお囃子）、地域ボランティアによる家庭科の裁縫や調理実習補助、朝の読書タイムでの読み聞かせと、地域の方々や各団体に色々な形で教育活動に参画いただいている。

今後も『地域と学校で育つ飯岡っ子』の目標を共有し、チーム学校の緩やかなネットワークとして連携・協働することで、子供たちに多様な学びの機会を提供していきたい。



地域とともに未来を切り拓く生徒の育成 ～地域人材の活用から未来を考える取組～

東庄町立東庄中学校教頭 藤田 伸平



1 本校の概要

本校は、千葉県北東部に位置し、農業を中心とする人口約1万3千人の地域にある。生徒・保護者は、温かな気質であり、地域の農村によくある「おらが学校」という雰囲気を持っている。そのため、学校運営に対してとても協力的である。学校評価においては、多くの項目で90%以上の保護者が学校運営に「肯定的」である。

生徒数は263名で、部活動や学習に意欲的に取り組んでいる。学習面では、表現活動や記述式問題などに課題がある生徒が見られる。

目指す生徒像として、「主体的に考え、行動し、課題を解決する生徒」「思いやりのある美しい心を持つ生徒」「健やかな体の育成に取り組む生徒」を掲げ取り組んでいる。

2 地域人材活用の状況

本校では、様々な教育活動の中で、地域の方々の協力を得ながら学習活動を進めている。また、昨年度から始まった町小中学校コミュニティ・スクールでの話し合いの場で新たな取組も進めており、この地域人材との連絡・調整は教頭をはじめ、学年主任、学校コーディネーターが協力しながら進めている。

主な活動は次のとおりである。

(1)キャリア教育での連携

地域人材を学校へ招聘して実施する1・2年生対象の「夢授業」という授業では、「短時間（移動時間の削減も含め）で職業を知る

ことができる、多種の職業を知ることができる、体験できない職業にも触れることができる」など、多くの利点が見られる。

また、2年生においては、この講話の前段で、隣接地域の専門学科や職業コースをもつ高校を中心とした紹介授業を展開していただき、高校進学からその先の就職に向けた、つながりのあるキャリア教育を行うことで、将来についての疑問や不安を払拭させるとともに、進路へのよりよい意識付けとなっている。



写真1 夢授業の様子

(2)日本文化体験での連携

3年生の総合的な学習の時間では、地域人材を活用して、日本文化体験を実施している。この日本文化体験では、日本独自の伝統文化について、長年経験を積んでこられた講師の指導のもとで体験を通して学び、理解を深めさせることを目的に実施している。「日本文化」を意識し、書道・茶道・華道・弓道・将棋・舞踊・琴・和菓子・囲碁・空手などを2日間で4時間の授業展開を実施している。生徒は、この活動を通して、文化体験だけでなく地域の方々とのふれ合いや交流にも深まりが見られるようになった。

(3)環境教育での連携

「利根川水域」の環境保全学習として、野生生物（野鳥）の保護（特に町の鳥：コジュリン・オオセッカ）を目的とする生物保護学習と「葦（よし）焼き」体験を実施、広大な地域の葦焼き体験を行うことで、野生生物の保護の重要性を知ることができた。また、この葦焼き体験の前に刈り取った葦を使って、茅葺職人の方の指導の下、「葦簀（よしず）作り」を行った。これらの活動を通して、絶滅危惧種のコジュリンやオオセッカの生息する利根川の自然を守っていこうという気持ちを強くもつことができたと感じる。



写真2 野鳥観察の様子

(4)乳幼児ふれ合い体験での連携

町子育て支援センターと共同で、3年生を対象に実施しているこの体験学習は、技術・家庭科（家庭分野）の保育学習の一環として、生徒が乳幼児と直接関わる活動である。乳幼児に触れる機会の少ない生徒にとっては、この体験を通して、命の大切さや思いやり、親としての役割や子育てについて考えるよい機会となり、子育ての大変さや大切さを学ぶことができた。



写真3 乳幼児ふれ合い体験の様子

(5)ドローンによる見守り活動での連携

学区内の旧小学校跡地で活動している「国際ドローン協会」の協力で、月に1回程度、生徒の下校時間に合わせて、ドローンによる見守り活動の実証実験を今年度より行っている。この活動のメリットとして、生徒の安全が確保できる（ドローンは高所から広範囲を見渡すことができるため、交通事故や危険な状況を早期に検知できる）ことや防犯効果に役立つ（ドローンの存在が犯罪者を威嚇し、生徒の安全を守るための抑止力になる）こと、また、教職員の負担の軽減（下校時の見守りを校内のモニター等で確認できる）などがあげられる。まだ検証の段階ではあるが、これが実際に運用されれば、職員の業務改善に大きく役立つと思われる。

3 地域連携を進める上での課題

多くの場面で地域や保護者からの協力を得ることができているが、日本文化体験のように長きに渡り行っている行事については、講師の高齢化が進み、依頼の継続が難しくなっている。また、行事が増えれば職員の業務も増えてしまうことになるので、内容の見直しや新たな人材の確保、地域人材との連携・調整を考えていく必要がある。

4 おわりに

生徒数の減少により様々な課題が生じている。そのため、地域の人材や行政機関等の協力・支援がなければ学校運営が難しくなっているが、学校の現状を伝え、地域の方々に理解していただきながら連携や協力体制を築いていくことは、教頭の大きな役目だと考える。今後も、教頭として工夫・調整しながら、生徒により多くの体験や効果的活動を実施することができるよう進めていきたい。



学校教育目標の達成のため、教務主任にできること ～「みんなで学び、みんなで励み、みんなで伸びる」 チーム辰東の取組～

市原市立辰巳台東小学校教諭 おまる なおや 小丸 直也



1 はじめに

本校は、市原市北西部のなだらかな丘陵地帯に位置し、住宅地や商業施設とともに自然にも囲まれた豊かな環境にある。全校児童は約400名で、地域の方々や保護者の協力のもと、明るく元気に活動に取り組んでいる。

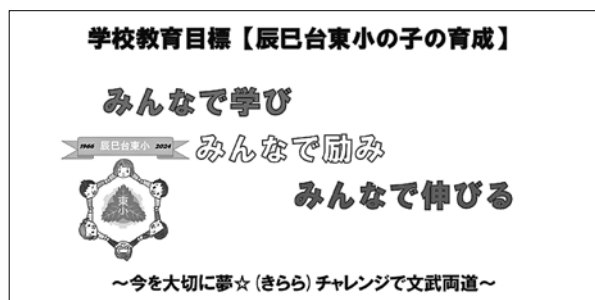
現在、本校に勤務して3年目、教務主任としては6年目となる。教務主任としての責任とやりがい、時代の変化に対応した教育活動を展開していくことへの難しさを感じながら、日々試行錯誤し業務にあたっている。

ここでは、「学校を動かす」ために教務主任として私が取り組んできたことを紹介する。

2 児童の幸せ＝学校教育目標の達成

学校全体の目標や方向性を明確にするため、第1回職員会議では、全教育活動が学校教育目標達成のためにあることを確認する。

児童の成長にとってよりよい教育活動が実施されるよう職員の思考のベクトルが明確になっている。



(職員室に掲示中の本校の学校教育目標)

3 ミドルリーダーとしての役割

管理職と教職員との情報交換が円滑に進む

ように、常日頃から職員とのコミュニケーションを心がけている。心境や業務の進行状況、教育活動における悩みなどを聞き出し、知り得た情報を管理職へ迅速に報告するよう努めている。職員会議等では、事前に提案内容の修正点を確認したり、対応策を練ってから会議に臨んだりして、会議及び教育活動がより充実するよう努めている。

また、授業における指導のポイントや有効な手立て等を確認したり、職員間での相互参観を設定したりしながら、授業力向上と指導力の高め合いに力を入れている。

4 若年層教員の能力開発を目的とした校務分掌の体制づくりと行事運営

本校の職員層は、その半数以上を若年層教員が占めている。校務分掌の多くや各行事のリーダーを若年層教員が担当し、ベテラン教員のサポートを受けながら分掌業務や各行事の運営を行っている。各行事の方向性を決定するための企画会議（主任会議）にも、提案者として若年層教員が積極的に参加するとともに、建設的な話し合いが行われ、若年層教員の資質・能力開発のための良い機会となっている。

5 業務能率化のための5つの取組

(1)情報伝達ツールの活用率100%

職員のICT端末にあるTeamsの投稿及びチャット機能を利用し、資料を添付して周知したり、担当ごとにチャットグループを組んだりして情報を共有している。業務に必要な

時間が短縮され、行事準備や児童への指導の時間確保に繋がっている。

保護者の欠席連絡とも連携して、欠席・遅刻・早退等の情報を確認することができる。電話連絡で受け付けた内容等も関係職員に知らせることができる。

児童と教員の情報伝達も上記のように行っている。授業計画や行事内容、週予定等を児童に向けて知らせるツールとしても有効である。また、アンケート回答やオンライン授業への参加等、今後も使用方法を改善しながら利活用していく。

(2)会議・打合せ時間の短縮化と効率化

職員会議や打合せ、学年会等、様々な機会にも Teams を活用して、資料の変更点や修正箇所をリアルタイムで確認し、編集や検討に役立てている。ペーパーレス化とともに、職員会議は30分間、打合せは15分間程度で終了することが可能になっている。



(Teams チャンネルに投稿している会議資料)

(3)AIドリルの活用

全学年で統一したAIドリルを採用している。漢字の書き順や計算の順序、答えの導き方等、採点基準を担当が設定してAIに採点させることができる。予習や復習、宿題等の点検に費やす時間を大幅に削減した。

児童も楽しみながら積極的に活用している様子が見られ、学習理解を深めるための良いツールとなっている。

(4)アナログ資料のデータ化と共有

アナログの資料もデジタル化し、職員全員がクラウド上で共有できるようにした。

①特別教室割り当ての変更と予約

- 職員室黒板に手書きだったものをデータファイルにして共有

②補教計画表

- 手書き提出をデータ化し、チャットに添付して提出するようにした。

③生徒指導・教育相談等の記録

- データファイルで共同編集化した。

④週案のクラウド化

- 各々で作成してした週案作成を、クラウド化し、専科・少人数教員と共同編集できるようにした。

上述の他にも、週報や月予定表、動静表や提出書類等をクラウド化することにより、余計な集約や印刷を省略することができる。

(5)職員の業務時間を確保・支援する

「学校を動かす」ためには、どれだけ職員が動ける時間を確保したかが重要になるため、以下のように支援体制を組んだ。

①クラブ・委員会・会議日課の設定（短縮）

②業務改善日の設置（行事前・通知表期間）

③学校支援ボランティア、学習サポーター、

スクールサポートスタッフの有効活用

④外部講師を取り入れた部活動指導

⑤休業中のコンクール精選（個人で応募へ）

⑥空き時間を確保し、事務作業時間を拡大

職員が活用できる時間の増加は、より充実した教育活動の実施に結びついている。

6 おわりに

今後も、「チーム辰東！」を合言葉に職員が一丸となり、児童の成長のため教育活動に全力で取り組んでいきたい。



わくわくする理科授業を目指して

船橋市立船橋中学校教諭 **井上 華恵**



1 はじめに

「なぜ?」「やってみよう!」をモットーに、自然の理(ことわり)を学ぶ。生徒と共有している授業の軸だ。「楽しそう、やりたい!」そう思えるような授業を創ることで、内発的動機を促し、生徒の力を伸ばしたい。「知らなくても分かる、知っていてもおもしろい!」全ての授業が、生徒にとってそんな時間であるように、日々実践している。

2 実践例

(1)導入で単元に命を吹き込む!

「この単元が楽しみだ!」そう思えるように、最初の授業ではリフレクションシート(図1)などを用いて、単元についての「なぜ?」を共有している。生物や地学は、生徒がイメージをもちやすいので、単元の内容に沿った疑問が出てきやすい(図2、左)。化学や物理など、イメージをもちにくい単元では、全体で現象等を確認してから、疑問探しをする。1年化学では地元の『ごみの分別ガイド』を配付して物質の性質に注目がいくように、3年化学では乾電池を観察して“アルカリ”“水溶液”などのキーワードから「電池のしくみ」に迫れるようにする(図2、右)。



図1 単元ごとにつかうリフレクションシート

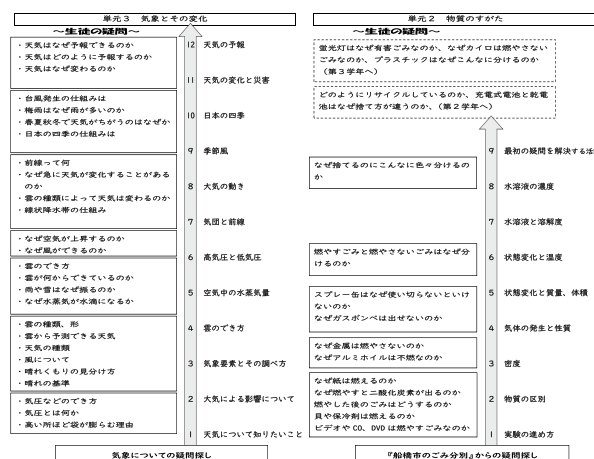


図2 生徒の疑問と単元の流れ

そうして出てきた各自の疑問を共有し、その後の授業の小課題(図3)でなるべく回収していくことで、少しでも“自分事”として、課題を捉えられるようにしている。また、単元の学習をしていくほど最初の疑問に迫り、内容が深まっていくようなストーリーを設定することで、生徒は見通しをもちやすくなり、こちらも、次の内容に関連する部分を強調するなど、伏線が立てやすくなる。

- 課題1 電池に必要なものは何だろうか?(キーワード: **水溶液**と**2種類の金属**)
 課題2 **水溶液**と**電流**にはどのような関係があるのだろうか?
 課題3 電解質の**水溶液**にはなぜ**電流**が流れるのだろうか?
 課題4 **金属**の種類によってどのような違いがあるのだろうか?
 課題5 電池はどのようにして電気エネルギーをとり出しているのだろうか?

図3 小課題の例(3年化学)

雰囲気づくりも大事にしている。例えば3年地学では、初回の授業で人々が天体の観測から方角や季節を読み解いてきたという詩を読みあげ、掲示物にしておく。理科室は暗幕を閉めることで宇宙を演出し、天球儀や天体望遠鏡などを出しておく。部屋に來ただけで、宇宙モードになれる仕掛けだ。

(2)理科の強み、実物を生かして

理科の強みは、何といっても“物”を扱えることだと思う。毎時間、何か必ず教材を用意するようにしている。何やら道具が準備されている、先生が何かを持って来た…それだけで生徒のわくわく度が高まる。可能な限り実物を用意する。実物が難しい単元も、なるべく体感できるような工夫をする(図4)。画像の場合も、身近に感じてもらえるようになるべく自作のものを使う。前日に、校庭で撮影した金星の写真などだ。(特に、金星との自撮り写真は生徒受けがよい。)併せて授業の度に「昨日は星を見ましたか?」と聞き続けることで、「先生、昨日オリオン座が見えましたー!」「星の写真がきれいに撮れました!」という生徒がでてくる。物理の時間も、ボールをひとつポケットに忍ばせれば、色々なことができる。「やってみよう!」のモットーは何より自分が率先して貫くようにしたい。



図4
壁面に星座を貼り、
教室全体を天球にする

(3)わかる、できるからおもしろい!

生徒がノートやレポートを書いている時間は、決めたルートで全員の近くを通れるように机間をまわる。近くに行くと質問してくれる生徒がいる。手が止まっている生徒がいたら、こちらから声をかける。共有の時間も大事にしている。「仮説こうなるよねー?タイム」や、「結果からこんなことが分かるよねー?タイム」と称して、自由に相談できる時間をとる。状況によっては立ち歩きも許可する。自由に学び合い、不安を取り除く時間だ。「ああ、そういうことか!」「なるほどー!」というやりとりが自然に出てくるように、私自身も話合いに参加しながら導いていく。授業アンケートから、「話合い活動をするとうっかりやすい」と答えた生徒が89.7%だった。

レポートには、赤ペンでサッと添削し、次の時間には返却する。生徒は写真を撮ってロイロノートに提出。提出箱に画像があるので、時間がある時にまとめて転記でき、こまめな形成的評価にもなる。今のところ最も時短で効率がよい方法だ。レポートにはループリック(図5)を示し、生徒に基準を示しながら、こちらも評価がぶれないようにする。生徒の理解度を知ることができ、こちらもすぐに次の指導に生かすことができる。

物理 NO. () 月 () 日 () 年 組 番 氏名		NO. () へのプリントが分かるように書いておこう! 月 () 日 ()	
酸性・アルカリ性の正体		結果> (事実を基にまとめてみよう! 気づいたこともメモしよう!)	
目的> (どのような疑問を解決したいのかはっきりさせよう!)			
仮説> (どう確かめる? どのような結果が考えられる? 検証は?)			
わたしの考え	参考になった考え		
その根拠		考察> (結果から分かることを書こう!)	
準備>			
方法>			
<ループリック> B 酸性・アルカリ性を示すもとは何かを考えている A 根拠を元に酸性・アルカリ性を示すもとは何かを化学式を用いて述べている			
ループリック> (酸性・アルカリ性を示すもとは何かを考えている)		振り返り> (自分の取り組みや新たな疑問などを書こう!)	
A (根拠を元に酸性・アルカリ性を示すもとは何かを化学式を用いて述べている)		※よく考えよう! 自分で考えよう! 結果的に正しいか? A, B, C 結果的に正しいか? A, B, C 結果的に正しいか? A, B, C	

図5 レポートの例 (左下にループリック)

3 おわりに

教員になって最初の頃は、やるべきことに追われて日々を乗り越えることで精一杯だった。そんな中、ずっと譲れないものは理科の授業に対する想いだった。興味のない生徒をどうしたら振り向かせられるか、興味をもっている生徒をどうしたら満足させられるか、必死に考えた。その中で、とにかく自分が真剣にやるという姿勢を意識した。3年生を教えるこの時期には、天体オタクになり毎日空を見上げる。日々の生活が教材研究になる。今、理科室の壁には一面に、黄道十二星座が貼ってある。そして実は、星の部分に蓄光シールが貼ってある。授業中に消灯すると「わあー!」っと歓声があがる。この声を聞くために、これからも私は理科オタクとして一番わくわくしていきたい。



「未来へつなぐ道徳教育」を目指して

横芝光町立上堺小学校教諭 さいとう ゆい 齊藤 優衣



1 はじめに

本校は、学校教育目標を「笑顔いっぱい いきいき学ぶ 上堺っ子 ～学びをつなぐ 心をつなぐ 未来へつなぐ～」とし、令和4年度に「特色ある道徳教育推進校」の指定を受け、道徳教育の研究に努めてきた。全校児童89名の小規模校であり、異学年間、男女間での仲が良く、活発に活動する姿が印象的である。一方で、小さな社会で生活をする児童にとって、固定化された人間関係や人とのつながりの意識の薄さが課題であり、学びをよりよい生き方につなげていくためには、道徳教育の充実を図ることが重要であると感じた。この考えに至ったのは、道徳教育の研究、公開授業がきっかけだった。私が学級担任としてできることは、学校、家庭、地域が協力して、子供たちの道徳性を育むことだと考え、「つなぐ」をテーマに以下の実践に取り組んでいる。

2 日々の実践

(1)道徳科の学習

①書く活動の充実 (ICTの活用)

書く活動の目的は、自己を見つめ振り返り、他者と考えを共有し、自身の思いを学びにつなぐことである。主体的・対話的で深い学びに向け他者と対話をするためには、まず自分の考えをもつことが不可欠であり、その時間を大切にしている。そこで、児童が視野を広げたり、他の考えに触れたりする機会を設けるために、ICTの活用に取り組んでいる。

1人1台端末を活用し、考えを言語化・視覚化することで、様々な考えに触れながら物事を多面的・多角的に考えられる。友達の考えをリアルタイムに確認できるように、共同編集機能のあるアプリの活用や、電子黒板へ児童の思考の経過を提示している。友達の考えを参考にしながら自分の考えを書くことができるため、考えを言語化することが苦手な児童に対しての支援にもつながっている。

②思考をつなぐ板書の工夫

児童が振り返る場面で思考のもととなるのが、板書である。構造的な板書を意識することで、児童が板書を確認し、1時間の学びを振り返りながら、自分の考えをまとめることができる。心情メーターや人物関係図などとともに、児童の発言からキーワードとなるものを色分けし、板書をするよう意識をして取り組んでいる。



③教師の説話

学びを実生活とつなぐために、授業の中に、必ず説話を入れるようにしている。ここで注意をしていることが、担任の考えの押しつけにならないようにすることである。今までの経験の中で、道徳的価値に当てはまる場面、実際に経験したことを児童に伝える。また、導入で活用するアンケートの中に、担任の経

験を取り入れることもある。子供たちにとって身近な大人である担任の体験や説話は、興味関心が高く、道徳心を育む上で、非常に効果的であると感じている。

(2)道徳教育として

①学級通信の発行

学級通信発行の目的は、児童と児童、児童と担任、児童と保護者、担任と保護者をつなぐことである。学級通信を通して、日々の学習内容や児童の学校での姿、様子を紹介し、家庭と共有している。また、道徳科の授業をより生活場面に結びつけるためにも、気になった児童の行動や学級での出来事を取り上げ、保護者に伝えている。担任としてのこだわりは、「手書き」である。それは、感じたことをすぐに伝え、担任自身の想いをより理解してもらうためである。その時々強いメッセージを載せて発行し続ける姿を児童に見せることで、何かを感じ取ってほしいとも思っている。また、子供の実態を家庭に理解してもらうことで、親子の会話のきっかけとして活用してもらうとともに、家庭の教育力向上を図っている。さらに、児童の活躍を載せることで児童の意欲の向上、学校教育への理解を深めることもねらっている。

②学級活動の充実

授業の中で、児童が安心して自己表現をするためには、認め合うことのできる学級の雰囲気が必要である。特に、道徳科の学習では正解は1つではないので、子供たちの多様な考え方を認め合い、受け入れつつ、自分の考えをもつことが大切である。その基盤となるのが、学級経営であると考えている。

そこで、学級活動では児童同士の心をつなぐために児童が自己開示をし、自己理解、他者理解を図ることができる場面を多く設けている。以下の取組の共通ルールは絶対に否定

しないことである。取組の一例を紹介する。

(ア)日記リレー

日直が日記を書いて、次の日直にリレーしつなぐ活動である。その日の出来事で、自分が感じたことや思ったことなどを学級全体に伝えるものである（用紙：10cm×10cm）。その日記を掲示することで、自分の思いを他者に伝えることができる。この日記では、必ず、感想を書くことを意識させている。

(イ)詩の視写

書く活動へつなぐ取組として、児童が詩集を読み、「今、学級に伝えたい詩」を選ばせている。なぜその詩を選んだのかを伝え合う活動を通して、互いの考えを理解し合うことができる。また、その詩を学級全員で音読したり、視写をしたりすることで、自己有用感を高めるようにしている。

3 終わりに

道徳教育の要となるのは、認め合うことができ、安心感のある学級の雰囲気である。その雰囲気を作るために働きかけることが担任としての役割だと感じている。道徳科の学習の中で最も不安に感じる場面が、発問を投げかけた後の「沈黙」の時間である。静まりかえる教室で、子供たちと向かい合う時間は不安が押し寄せ、次の言葉を投げかけたくなくなってしまう。しかし、子供たちにとって「沈黙」の時間は決して無駄ではない。「沈黙」＝「自分自身、教材、問題場面」と真剣に向き合っている時間と考え、担任としても児童の考える姿を認め、傾聴する姿勢を大切にしていきたいと思う。子供たちにとって、保護者よりも長い時間を共に過ごしている担任として、日々の道徳教育の実践を大切にし、学びを未来へつなぐ道徳教育に取り組み、子供たちの成長を支えていきたい。

外国語

帯活動とオンライン交流授業を組み込んだ「話すこと [やり取り]」の技能を高めるための授業モデルの開発と評価 - 英語科教員誰もが取り組める実践を目指して -

市原市立国分寺台中学校教諭 みずま けんた 水間 健太

遠隔地にいる生徒同士が英語で交流する活動を通して「話すこと [やり取り]」の技能を高めるため、市原市内の中学校2校の2年生を対象に帯活動とオンライン交流授業を行った。やり取りする際のテーマを「自分の将来の夢とその実現に向けてしていること」という教科書に掲載されているものを選ぶ等、教員が取り組みやすい実践を目指した。その結果、段階を踏んだ帯活動と生徒が互いに自分の考えや気持ちを伝え合う活動の工夫により、話すことの技能が向上し協働的な学びが促進された。また、教員の参考になるような授業モデルの開発および評価方法の提案を行うことができた。今後は、実践をより良くしていくとともに、市や県、全国へと成果を発信していきたい。

道徳

生徒が「生き方の問い」を生む道徳科授業の研究 - 問いⅠ・問いⅡづくりによる生き方の探求を通して -

柏市立大津ケ丘中学校教諭 はしもと まいか 橋本 舞佳

「人間としての生き方についての考えを深める」という学習活動を授業でどのように実現するかが自身の課題であった。そこで、教材の人物の生き方に対し生徒が問い（問いⅠ）をつくり、その探求を通して生徒が自分に問う「生き方の問い（問いⅡ）」を生む道徳科授業の在り方を研究した。理論研究と調査研究から、生徒の問いの質の向上を図り、問いⅠを探求する過程で対称軸の思考や生き方を支える価値観を明確にする問いを補う工夫が必要であることを明らかにした。中学2年生を対象に検証した結果、多くの生徒が問いⅡを生成でき、問いⅠの探求という協働の学びの充実にもつながり、生き方に対する探求心を高めることが分かった。生徒の問いづくりに関心をもつ先生方に活用していただきたい。

現代的教育課題

地域との協働学習による児童の情報活用能力の育成 - 1人1台端末を活用したGoogleサイトを用いたウェブサイト制作を通して -

柏市立大津ケ丘第一小学校教諭 こばやし ふみかず 小林 郁和

情報活用能力は学習の基盤となる資質・能力として位置付けられており、その育成のために問題解決・探究における積極的な実践が求められている。本研究では、第5学年の総合的な学習の時間に、1人1台端末とGoogleサイトを利用したウェブサイト制作による地域との協働学習を展開し、情報活用能力の向上を図った。児童は「地域の交流を促進するウェブサイトの制作」という課題を設定し、商店街、公共施設、農家と協働しながら学習を進めた。活動はオンラインにとどまらず、「商店街での農作物販売」「公共施設での研究発表」などの直接的な交流も促進した。社会と連携したウェブサイトによる情報発信によって情報活用能力が向上した一例として、参考にいただければ幸いである。

知的障害

自己有用感を高めるための指導・支援に関する研究

-総合的な探究の時間（地域学校協働活動）を通して-

県立飯高特別支援学校教諭 ^{えざわ}江澤 ^{かな}加奈

他者から称賛を受けた時に肯定的に捉えることが難しい生徒がいる状況があった。自分の良い面に気づき、知ることによって地域や社会で活かそうとする生徒が増えてほしいと考え、本主題を設定した。高等部生徒を対象に、総合的な探究の時間（地域学校協働活動）で、「地域のために自分たちにできることを考える」ことを目標に実践を行った。生徒の発案を基に授業を構成したことで主体的に活動する姿が見られた。グループ活動で役割を果たし、他者（教員、友達、地域の方）と関わりながら、多くの称賛を得たことで生徒の自己有用感が高まる結果が示された。今後も、学校全体で地域学校協働活動を充実させ、自己有用感が高まる指導・支援の検討を続けていきたい。

特別支援教育課題

保護者の援助要請を導く支援スキルの在り方について

-保護者の援助要請行動が変容するプロセスに着目して-

県立君津特別支援学校（前安房特別支援学校館山聾分校）教諭 ^{すずき}鈴木 ^{まき}真紀

保護者が他者に援助要請する力を獲得することは、将来に渡る有効な養育力につながる。そこで、保護者の援助要請を導く教員の支援スキルの在り方を明らかにしたいと考えた。本研究では、幼稚部での取組について保護者の援助要請行動が変容するプロセスに焦点を当て分析した。その結果、子供、保護者、教員の関係性に合わせた支援があることで6つの時期区分を経て変容していくことが明らかとなった。そのことを踏まえ、教員の支援を標準化するために、関係性をアセスメントするシートや支援の視点を導く確認リストの作成を行った。今後は、各研修会等で研修ツールの活用を行い、有効性を検証しながら改善していくとともに障害の有無や年齢に問わず活用できる方法を探っていきたい。

特別支援教育課題

1人1台端末を活用した自立活動の指導の充実

-指導者及び生徒が活用可能なツールの検討-

柏市立中原中学校（前風早中学校）教諭 ^{ふるかわ}古川 ^{さちお}幸夫

特別支援学級における自立活動の指導の充実のために、1人1台端末の活用の推進を目指し、生徒の自己理解を深めるための「自分発見ツール」を作成・活用し、実践を行った。その結果、生徒の自己理解を深めることができた。また、「自分発見ツール」と比較することができる「自立活動お助けツール」を作成し、指導者が活用することで、生徒の実態把握及び指導内容の検討に生かすことができた。これらのツールの活用は、実態把握や指導内容の検討を教員間で共有することにも効果的であった。以上のように、自立活動の指導の充実のために1人1台端末を活用して一定の成果を得ることができた。これらのツールは、柏市教育委員会指導課が運営するサイト「Kashiwa city GIGA School」に掲載する。

教育臨床

「ケース検討学習モデル」の提案

県立清水高等学校（前市川工業高等学校）教諭

県立榎の実特別支援学校教諭

県教育庁東上総教育事務所指導主事（前県立長生特別支援学校教諭）

長生村立一松小学校（前白子町立関小学校）教諭

あか お ま い
赤尾 麻衣
いし い なつ え
石井 夏江
こ やす ゆ か り
子安裕佳里
さ と う よ う こ
佐藤 陽子

学校現場においてケース会議の認識は教員によって様々であり、ケース会議が有効に機能していない現状もみられる。そこで、ケースの捉え方やケース会議の流れを学ぶために、＜未整理事例＞を用いた「ケース検討学習モデル1」と＜架空事例＞を用いた「ケース検討学習モデル2」を作成した。参加者が会の流れや目的の確認による安心感を基盤とした上で、学習要素が可視化された分析シートの活用に臨んだ結果、見立てや支援策を共有することができ、議論すべき点がより明確化されることがわかった。ケース会議をより質の高いものにするためには、「ケース検討学習モデル」を導入した校内研修を継続的に開催し、協議の仕方や子供を見る視点を洗練させていくことが必要である。

企業等派遣

ホテル業界とともに考え学ぶ、障害者雇用

県立千葉特別支援学校教諭

ふくしま けいた
福島 啓太

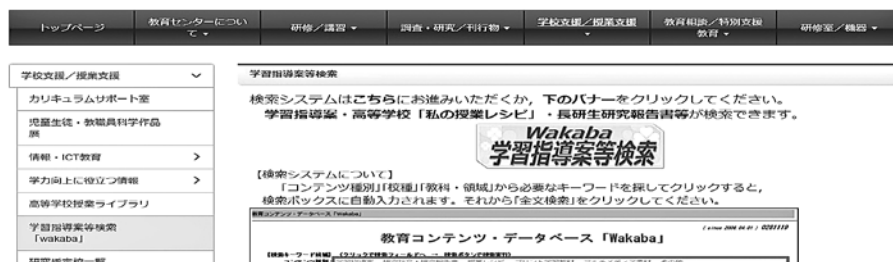
特別支援学校高等部で進路指導に携わる中で、障害者雇用の考え方を企業と学校で共に考える機会をもちたいと考えた。またホテルにおいて多様な業務を経験し、障害者雇用についての考えを社員の方々に聞くことで、実情を理解し、進路指導の一助にしたいと考えた。今回の研修先である「ホテルポートプラザちば」では障害者を雇用しており、実際に障害者雇用を行っている職場の方と多くの意見を交換することができた。そして、あいさつなど基本的なコミュニケーション能力に加え、自分を表現する力が必要であることが分かった。様々な就労先を志す生徒たちに自分自身が経験した事を授業の中で伝えることにより、生徒の進路選択に生かしていくことができると考えている。

研修（企業等派遣を除く）のより詳しい内容については、教育コンテンツ・データベース「Wakaba」で閲覧することができます。



千葉県総合教育センター

Chiba Prefecture General Education Center <https://www.ice.or.jp/nc/>



左ページへの
二次元コード

高等学校における情報活用能力の習得に関する 生徒の意識調査

県立千葉西高等学校（前佐倉高等学校）教諭 ^{きゅうとく}久徳 ^{いくみ}郁美

1 はじめに

高校においてもBYODによる情報端末を活用した授業が始まり、思考力、判断力、表現力等を育成する授業にはどういったICT活用が効果的なのか研究したいと思い教職大学院へ進んだ。

ICTを活用し、習得した知識・技能を使いながら、情報を集め、自分の考えをまとめる学習活動が行えることが分かったが、生徒自身の「情報活用能力」の意識はどのように変化するのか調査をした。

2 研究の実際

公立高等学校第1学年2クラス（78名）を対象とし、情報端末を活用した授業が情報活用能力の習得に関する意識にどの程度影響を与えたかアンケート調査をした。

期間は2023年9月25日から11月16日の期間で週に2回、授業説明を含め全14回実施した。

基本的な授業の流れは、まず教師が講義を行う前に、課題を学習プラットフォーム上で提示し、個人またはペア・グループでPowerPointなどプレゼンテーション機能に意見を記入する。つぎに話し合う時間を設けて意見を練り上げる。その成果物をもとに生徒が発表したり、教師が補足を行ったりする。

生徒自身または生徒間で意見を考える場面や、活動を行う上での気づきを共有する場面を意識した。

3 研究の結果

生徒が自身の活動に照らし合わせて回答できるように質問項目を33項目設定し、4件法

（十分行える、行えると思う、自信がない、わからない）で尋ねた。調査の結果、肯定的な回答が10%以上増加したのは9項目であった。

そのうち上位5項目を増加率が高い順に載せる（以下表）。

表 肯定的な回答が増加した上位5項目（%）

	事前	事後
(1)スプレッドシート上に集めた情報の整理の仕方 や作成するグラフの種類を変えることによって、 様々な視点から情報を捉え、傾向や変化につい て考える。	42.9	→ 70.9
(2)スプレッドシート上に記載した情報を様々な基 準に基づいて、並べ替えたりグラフ化したりし て整理し、分析する。	42.9	→ 63.3
(3)必要に応じてマイドライブや共有ドライブに ファイルを格納したり、友だちとファイルを共 有して学習に活用したりする。	71.4	→ 91.1
(4)スライド上に用意されたフローチャートや自分 で作成したフローチャートを使い、自分の考え や問題解決のための手順を表現する。	44.2	→ 60.8
(5)スプレッドシートを使い、意見を交換したり、 振り返りをしたりする。	72.7	→ 89.9

4 研究の成果と今後に向けて

(1)成果

短期的な活用でも生徒は定期的な端末の活用を通して情報を整理したり、分析したりする意識は高まることが分かった。また、高校の発達段階では様々なアプリケーションの活用を短期間で習得し、さまざまな言語活動を行える可能性があることが分かった。

(2)今後に向けて

日常づかいをしていった先に、生徒の意識だけでなく、実質的な能力に結びつけることが必要である。近年、デジタルツールの進化はめざましく、将来生徒たちは想像もできないような技術を用いて課題解決を行っていく必要がある。教師も新たな学習方法を学び続ける必要がある。

タブレット端末を活用した教材づくりと授業実践 (小学校2年生)

館山市立館山小学校教諭 黒政 晋太郎

1 はじめに

私はICT活用の授業づくりコーディネーターとして3年目となり、本校には他市から異動してきて1年目となる。前任校とタブレット本体は違うものの、使われているOSや授業支援システム等は大きく変わっておらず、円滑に使うことができています。

本校では、Microsoft Windowsのタブレット（ARROWS Tab）、主に授業支援システムは「SKYMENU Cloud」を使用している。

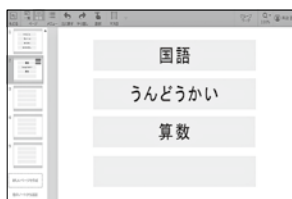
以下に、SKYMENU Cloudの「発表ノート」を使った今年度の実践を紹介する。

2 実践内容

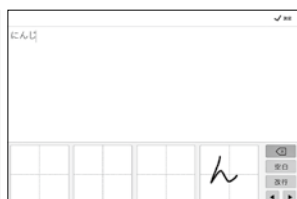
(1)国語科「言葉のなかまさがしゲームをしよう」

だいの
まの
に
あつめた
言葉のなかま
をまぜ、も
ん

文字入力ができる4枚のカードを並べた発表ノートを作成した。文字の入力は、手書きでできる。速くできた子供用にノートのページを何枚かコピーして作っておいた。



配付した発表ノート



手書き入力

(2)国語科「はんたいのいみの言葉、にたいみの言葉」

つぎの言葉のはんたい
のいみの言葉を考えて、
組になるカードを作りま
しょう。

発表ノートの上のカードに下のカードを動かして、組み合わせることで反対の意味の言葉ができるようにした。

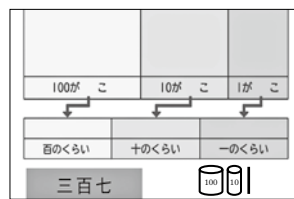


配付した発表ノート

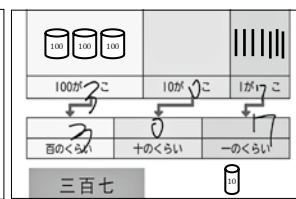
(3)算数科「100をこえる数」

三百七、五百十、
九百を数字でかきま
しょう。

数字で答えを書くだけでなく、数え棒を操作して、考えられるように作成した。

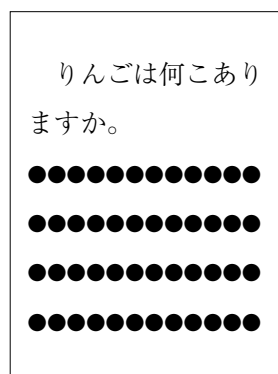


配付した発表ノート

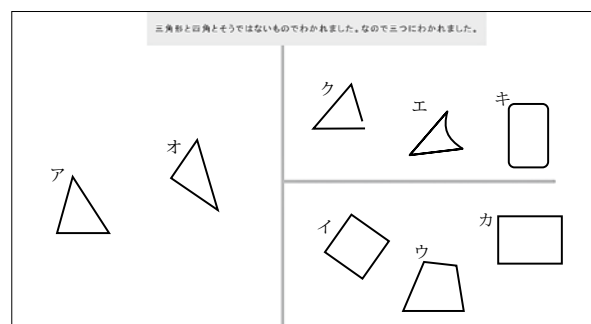


子供の発表ノート

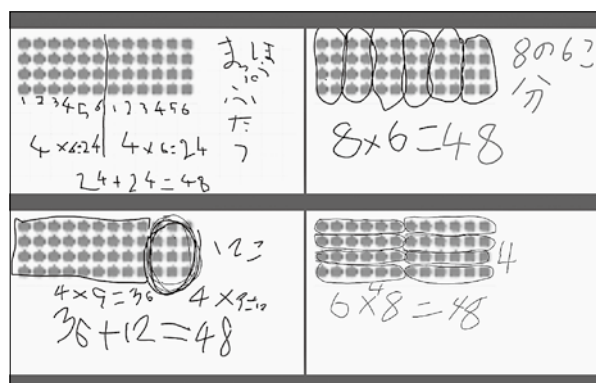
(4)算数科「九九のきまり」



りんごの図を貼り付けて作成した。「ライブ公開提出箱」の機能を使って、他の子供の発表ノートをリアルタイムで見られるようにした。



子供の発表ノート

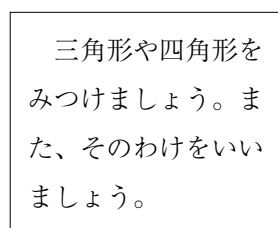


子供の発表ノート



実際の授業での様子

(5)算数科「三角形と四角形」①



1つ1つの図を動かして、三角形や四角形などに分類できるように作成した。

(6)算数科「三角形と四角形」②

みのまわりから、三角形や四角形の形をしたものをみつけましょう。

撮影したものに、どんな形かが分かるように線を書き込ませた。



子供の発表ノート

3 おわりに

自分自身がタブレット端末を活用することに意識していることは、「簡単に操作ができること」「友達との考えを共有できること」である。また、教材づくりでは、教科書の内容を少しアレンジすることでできるものと考えている。

今年度2年生で実践を行ったことで、低学年でも十分にタブレット端末を効果的に活用できることがわかった。これからも実践した内容を広めていきたい。

既存の教科と教科「理数」の相互発展に関する研究 (2年目／2年研究)

県総合教育センターカリキュラム開発部

1 研究の目的

高等学校の「各学科に共通する各教科」中の「理数」(以下「理数」とする)の指導内容を基に、理科や数学といった既存の教科で活用できる授業事例を紹介することで、既存の教科と「理数」双方の発展を目指す。

2 研究を行う背景

(1)学習指導要領等での扱い

高等学校学習指導要領解説 理数編 1 章における「理数科設置の経緯」の中で、「数学や理科に関する横断的なテーマに徹底的に向き合い考え抜く力を身に付ける」ことで、「知の創出をもたらすことができる人材の育成」を目指すとされている。また、「教科等横断的な学習の推進について」(文部科学省初等中等教育局)の中では「STEAMを構成する各分野が複雑に関係する社会を生きる市民の育成の側面」についても示されている。

(2)教科「理数」の現状

「理数」は、SSH等で行われる課題研究と、既存の教科や「総合的な探究の時間」との橋渡しとしての役割を期待されているが、現状では「理数」を開設する公立高等学校の多くが理数に関する学科を設置している学校であり、普通科高校とは縁遠い存在となっている。また、既存の教科の授業では、主体的・対話的な活動が推進されているが、全てにおいて探究的な展開が浸透しているわけではない。

3 研究の概要

設置の目的に鑑みると、探究的な活動は敷

居が高い特別なものではなく、より一般的で親しみやすいものでなければならない。そこで、「理数」で培われた知見を基に、既存の教科に取り入れやすい規模での取組みを紹介する、事例集を作成することとした。

4 進捗

(1)事例集の編集

研究協力員及びその所属校における授業実践例をもとに、次の2点を強調して編集した。

①探究の切り口の明確化

初めて探究的な活動に挑戦しようとする先生にとって、切り口が一目でわかるように留意した。将来的に、自分がこれまで行っていた実験や観察を、探究的にバージョンアップできるようになることが望ましいからである。

②簡潔な評価計画

探究の切り口と連動した規準に絞り、できた・できなかった等の判別で簡潔に評価できるよう留意した。日常的に評価を行うことが、学習改善・指導改善につながるからである。

(2)その他

事例以外に、次に挙げる項目等を掲載する。

①「理数」と総合的な探究の時間における探究活動の特徴について

②既存の教科における探究活動の成立

③探究に挑戦するための「切り口」Q & A

④普通科高校における「理数」導入の経緯と課題

なお、本事例集は令和6年度末に千葉県総合教育センターのWebページ上で提供する予定である。

小学校における自由研究（科学論文）の手引き作成に係る研究（2年目／2年研究）

県総合教育センターカリキュラム開発部科学技術教育班

1 主題設定の理由

小学校学習指導要領解説理科編で、理科改訂の趣旨における具体的な改善事項について、教育内容の改善・見直しのために「生徒自身が観察、実験を中心とした探究過程を通じて課題を解決したり、新たな課題を発見したりする経験を可能な限り増加させていくことが重要」と明記された。

これを踏まえ、小学校における自由研究（科学論文）の手引きを示すことにより、自由研究における教員の指導技術向上に寄与し、そのことが児童の自主的、自発的な活動を促すための資質・能力の育成につながると考え、本主題を設定した。

2 目的

- (1)小学校教員向けの手引きを作成し、周知する。
- (2)教員の自由研究に対する指導力向上に寄与する。
- (3)児童の自主的、自発的な活動を促すための資質・能力を育成する。

3 研究の概要

(1)教員向け資料「自由研究 こんな時どうする？Q&A集」

現在の多くの小学校で、自由研究は夏休みの宿題の一つとして児童に提示され、夏休みのしおりに簡単な説明があるだけのことが多いのではないだろうか。そのため、自由研究が児童にどんな影響を与えるものなのかがあまり伝わっていないのではないのだろうか。経済産業省・未来人材ビジョンによると、未来（2050年）に必要とされる力に「問題発見力」「的確な予想」「革新性」等が挙げられて

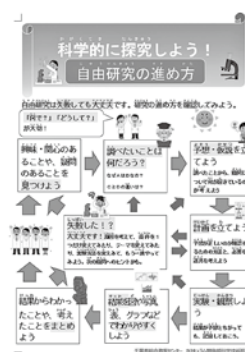


図1 探究過程

いる。自由研究はこの未来に必要とされる力の育成に、非常に有用な機会であると言える。また、教員が自由研究の意義を理解し、児童に説明することが大切である。自由研究の意義は、児童が興味・関心のあることや、疑問に思ったことについて調べ、自分なりに考えたことを、他の人に教えるという一連の「探究過程（図1）」にある。そして、自由研究は探究過程を通じて、児童の見る「世界の解像度、彩度、明度」を上げるものとなることが重要である。上記のような内容等をQ&A集に掲載し、指導する教員のニーズに合った内容の充実を図る。

(2)児童向け資料「自由研究の手引き」及び「自由研究の手引き ダイジェスト版」

児童が自主的・自発的に活動する資質・能力の育成を目指すための資料である。なお、ダイジェスト版は保護者が目にもすることも想定し、保護者にも自由研究のやり方等を周知し、理解と協力を得たい。

(3)日々の授業を「探究型の授業」へと転換

普段の授業を「探究型」へとするための資料を、教員向け資料「自由研究 こんな時どうする？Q&A集」に掲載する。

不登校の子供の心身変化を的確に捉えた支援の在り方 ～子どもと親のサポートセンターの実践からみえてくるもの～

県子どもと親のサポートセンター教育相談部

1 研究の目的

本研究では、子どもと親のサポートセンター（以下センター）における主訴を「不登校」とするケースを調査し、学校と家庭との間に齟齬を来しているケースに注目した。初期の登校渋りや欠席に対する学校による適切な対応が不十分なため、その改善をしていくことが求められる。

そこで、不登校支援の実践から、初期対応の重要性を再確認できる「ケース事例集」の作成及び、「初期対応プログラム」を開発し、学校現場で実践できる関わりのヒントの提案を目指す。

2 研究方法

(1)「ケース事例集」の作成

センター内で対応している「不登校」を主訴とした事例収集及び分析を通した「ケース事例集」の作成を行う。

(2)「ケース事例集」の検証

「ケース事例集」の活用における初期対応の重要性について、アンケート調査を行う。

(3)「不登校初期対応プログラム」の作成

子供の心身の変化を的確に捉え、状況に応じて対応できる「不登校初期対応プログラム」の作成を行う。

(4)「不登校初期対応プログラム」の実践及び検証

調査研究協力校における「不登校初期対応プログラム」の実践、質問紙調査、半構造化面接による評価を行う。

3 研究の概要

(1)「ケース事例集」の作成

①質問紙調査

「不登校」を主訴とした事例に対し、支援の実践について情報収集を目的とした質問紙調査をセンター内職員に実施した。保護者の思いとして、連絡不足や相談時の不十分な対応等について意見が挙げられた。

センターでの支援のポイントとしては、焦らず小さなステップで支援することや、子供の安心感を重視すること、保護者への寄り添いと傾聴が重要であるとの意見があった。

②「ケース事例集」作成

構成は、(ア)事例の概要(イ)保護者の学校への思い(ウ)初期対応の課題(エ)初期における見立て(オ)今後の学校の対応(カ)会議後の見立て(キ)今後の支援(ク)センター的関わりのヒントの8項目とした。

③「ケース事例集」作成から見えたもの

「ケース事例集」の作成過程で、子供や保護者の思いを再確認し、初期対応の重要性を認識することとなった。そこで、子供の心身・行動の変化を初期段階で把握し、適切に対応するための「不登校初期対応プログラム」を作成することとした。

(2)「ケース事例集」の検証

①アンケート調査

「ケース事例集」から初期対応の重要性を認識することができたか、アンケート調査を教育相談上級研修受講者に実施した。

②考察

アンケートの結果から、初期対応を捉えるタイミングやケース会議の手引、校内研修での活用等、「ケース事例集」が初期対応の重要性を理解するために有効なツールであることが明らかとなった。課題としては、様々な主訴のケースを継続して収集し、拡大していく必要がある。

(3)「不登校初期対応プログラム」の作成

不登校の子供に表れる初期の心身・行動の変化についてセンター内職員で検討した。主な視点は、心のエネルギーの可視化、初期と捉える時期や変化の具体的内容の理解、家庭へのアドバイスである。これらをもとに、四つのシートを作成し「不登校初期対応プログラム」を構成した。

①こころとからだの観察シート「ここカラーシート」

不登校の子供の心のエネルギーを曲線で可視化したもの。対応策等、時系列で具体的に記載している。

②「ここカラーチェックシート」

欠席初期の子供に表れる心身・行動の変化を早期発見するために項目分けしたもの。

③「初期対応フローシート」

②「ここカラーチェックシート」を基に、どのように対応すべきかを示し、フローチャートにしたもの。

④「電話対応シート」

欠席7日のうち、初期対応として必要な3回の電話対応の手順について図示したもの。

(4)「不登校初期対応プログラム」の実践及び検証

①「不登校初期対応プログラム」の実践

県内の6校に協力を依頼し、実際に不登校及び登校状況の不安定な子供に関する案件が発生した場合の学校における初期対応につい

て検証した。その後、教職員に事後アンケートと半構造化面接を実施した。

②考察

事後アンケートでは、「不登校初期対応プログラム」に関して肯定的な意見が平均87.5%という結果になり、このプログラムが子供の心身・行動の変化を早期に把握し、学校での迅速な対応に効果があることが明らかとなった。さらに、各校において実際に子供たちにプログラムを実践した中で、不登校の未然防止や学校への復帰に至ったケースもあった。各シートについては、ベテランから若年教員まで幅広い経験層から、初期対応の大切さを見直す意見があった。

4 成果と課題

(1)成果：本研究により、学校現場における不登校対策として「ケース事例集」及び「不登校初期対応プログラム」の効果が明らかとなった。

(2)課題：「ケース事例集」は、継続して様々な主訴のケースを収集し、学校現場に還元していく。「不登校初期対応プログラム」は、小中高等学校だけでなく、特別支援学校にも対応できるようにしていく。

5 研究のまとめ

学校現場においては、「ケース事例集」と「不登校初期対応プログラム」を使用し、学校と子供・保護者間で綿密な連携を図り、初期対応を明確にすることで、不登校の未然防止や深刻化を防ぐことができる。さらに、教員が子供理解のための教育相談に関する知識や視点を深めることも重要である。教育相談の「共通のものさし」として活用いただきたい。

「科学技術教育」のWebページ掲載について

県総合教育センターカリキュラム開発部科学技術教育班

1 はじめに

千葉県総合教育センターが毎年発行している冊子「科学技術教育」は、科学技術教育の振興と発展を目的に、科学・技術・家庭に関する情報や県内の優れた実践を幅広く紹介する情報誌である。令和6年度で通巻236号を迎えるこの冊子は、教育現場での貴重な情報源であり、充実した内容が読者に評価されている。また、教育関係者だけでなく、科学技術に興味をもつ幅広い層からも注目を集めてきた。

2 「科学技術教育」の魅力

「科学技術教育」は、教育現場での活用を意識した多彩な内容で構成されている。「特集」「トピックス」「授業のヒント」などのセクションを通じ、科学技術教育の実践や研究成果を幅広く発信している。今年度の特集「健康を科学的な視点で考える」では、科学技術と健康の関わりを多角的に考察し、日常生活や教育活動での科学的な視点の重要性を示した。また、「科学について思うこと」や「長期研修生報告」では、教育現場の視点を取り入れた深い洞察を提供している。執筆者は大学教員や公立学校教員、教育機関の専門家等であり、様々な立場からの意見に触れることのできる内容となっている点が魅力である。さらに、二次元コードを活用した読者アンケートを通じて、記事への意見や希望を集め、読者ニーズに応えた内容づくりを進めている。読者の声を反映しながら、より実践的な情報を提供している。

3 Web化への移行と利点

このたび、令和7年度よりWeb掲載のみの発行へ移行することが決定し、利便性を活かしてさらに多くの方に利用していただくための新しい一歩を踏み出すこととなった。今後は、オンラインならではの使いやすさを活かし、更なる読者層の拡大を目指す。Web化により、「保管場所を取らない」「どこでも手軽に読める」などの利点を活かし、より多くの読者に届けることを目指している。これに伴い、アクセス用URLや二次元コードの周知を強化し、学校現場に限らず幅広い層に利用されることを期待している。

4 おわりに

「科学技術教育」は形態が変わっても、その使命は変わらない。科学技術教育の振興と発展を担う媒体として、今後も充実した内容を提供していく。Web版となる新たな「科学技術教育」をぜひ御活用いただき、引き続きの御支援と御愛読をお願いしたい。



Web版
「科学技術教育」
二次元コード

令和6年度 通巻235号
「科学技術教育」表紙

令和7年度研修事業等の紹介

県総合教育センター

令和7年度のおすすめ事業を紹介します。詳細は「令和7年度研修事業一覧」を御覧ください。

※内容については、講師等の都合により変更する場合があります。

「子供が輝く」若手教員のための指導力アップ研修 ～個別最適な学び・協働的な学び・学級経営・学習評価の視点から～＜希望＞	
若い先生へ 自分の授業実践力や業務遂行能力を伸ばしませんか。 そのような思いをもっている皆さんのための研修です。 （内容） 「個別最適な学びと協働的な学び（ICTの利活用を含む）」と「教員のワークライフバランス実現に向けた時間整理術」を学びます。また、学習評価の在り方を指導主事から、学級経営について先輩教師から学びます。	（対象） 小・中・義務教育・中等教育学校の教員（希望すれば、高等・特別支援学校教員の受講も可）100名
一人一人の子供たちの心に寄り添う指導・支援を目指して ～生徒指導・教育相談・不登校支援研修～＜希望＞	
子供一人一人に寄り添った指導の在り方について学びませんか。 （内容） 生徒指導や教育相談の基本的な理論や方法、さらに一人一人の発達の段階に応じた児童生徒理解の方法を学びます。加えて、不登校や特別な支援が必要な児童生徒への対応について、演習を取り入れながら理解を深めます。	（対象） 小・中・義務教育学校の教員（高・特別支援学校の教員も受け入れるが、研修の内容は小中学校が中心）80名
「学びの未来づくり」授業改善研修～学習指導・学力向上・情報教育・特別支援教育～＜希望＞	
協議を通じて授業改善のポイントを考えてみませんか。 （内容） 「特別な配慮を必要とする児童生徒への指導」と「ICT機器を活用した授業実践」について学びます。加えて、「『授業づくりガイドブック』を活用した分かる・できるを目指した授業づくり」と「『主体的・対話的で深い学び』を通した授業改善」について学びます。	（対象） 小・中・義務教育・高等・特別支援学校の教員 ※対象に中等教育学校の教諭も含む 120名
明日からできる！基本の「キ」 ～授業づくり・学級づくり・特別支援教育・タイムマネジメント～＜希望＞	
教師としての基礎力を高めたい方にぴったりの研修です。 （内容） 児童生徒の学びに向かう力を高める授業の在り方やその指導法について、教科指導法だけではなく、教師の仕事のタイムマネジメント、より良い学習環境づくりや学習集団づくり、家庭学習等にも視点を当て、講話や演習等を通して実践的な研修を行います。	（対象） 小学校の教員・特別支援学校教員（主に小学部）50名 中・義務教育・高等・特別支援学校教員（主に中・高等部）20名

情報アラカルト

学級経営実践研修＜希望＞	
学級担任として学級経営力をアップさせたい人、集まれ！ (内容) 総合教育センターが作成した「学級づくりガイドブック」をもとに「好ましい人間関係を育む学級づくり」について理解を深めるとともに、自身の学級経営を振り返ります。	(対象) 小・中・義務教育・高等・特別支援学校の教員（対象に中等教育学校の教諭も含む）120名
保護者とのよりよい関係づくり基礎研修＜希望＞	
保護者対応への苦手意識をこの研修で克服しませんか。 (内容) 保護者等への対応の仕方について学びます。保護者等から意見や要望等が出されたとき、それに対応するために必要な資質及び実践力の基礎を身に付けることができます。	(対象) 幼稚園・認定こども園・小・中・義務教育・高等・特別支援学校の教員200名
「学校教育と生成AI」研修＜希望＞	
未来の学びを広げる！生成AIの活用で授業と校務をもっと便利に (内容) これからの教育に欠かせない生成AIを楽しく学び、授業や校務に活かす力を身につけませんか？先生方のアイデア次第で、未来の学びがもっと広がります！	(対象) 生成AIを利用することにより、授業や校務処理等の改善を図りたいと考えている公立の小・中・義務教育・高等・中等教育・特別支援学校の教員70名
出前あすなろ塾「科学的に探究する理科学習の進め方について」	
理科の授業をもっと楽しく！探究心を引き出す授業デザインを学ぼう！ (内容) 楽しく授業を行うための資料「授業デザイン集」と、児童生徒が理科の見方・考え方を働かせるための思考ツールなどの「指導資料」の活用方法について演習を通して学びます。小学生の問題解決の力、中学生の探究する力を育成することを目指します。	(対象) 市町村教育委員会が主催する研修会のうち、教職経験1～6年程度の小・中・義務教育学校教員（講師を含む） ※市町村教委の要請により実施
出前あすなろ塾「自由研究への取組で育てる探究心」	
自由研究を探究の第一歩に！主体的に学ぶ力を伸ばそう！ (内容) 自由研究は探究の過程を学ぶために有効な学習です。課題発見の方法や、子供たちが自分で調べ、考える力を引き出す指導法について、資料「自由研究の手引き」を使った演習を通して学びます。	(対象) 出前あすなろ塾「科学的に探究する理科学習の進め方について」に同じ ※市町村教委の要請により実施
出前中堅教員サポート塾「クラウドや生成AIの効果的な活用について」	
これで時短&質UP！クラウド&生成AI活用術 (内容) 校務の効率化も、授業の質向上も、今すぐ始められる！この研修では、クラウドツールを活用して業務をスムーズに進め、生成AIを使って授業アイデアや日々の指導を充実させる方法を学びます。どちらも、実際に端末を操作しながら、すぐに現場で使える活用法を体験できます。 （※研修時間と内容については、要相談）	(対象) 市町村教育委員会が主催する研修会のうち、学校リーダーとしての資質・能力を高めたい小・中・義務教育学校教員（中等教育学校教諭も含む） ※市町村教委の要請により実施

出前中堅教員サポート塾「情報モラル教育について」	
デジタル社会の担い手を育てる！情報モラル×デジタルシティズンシップ (内容) これからの情報モラル教育では、トラブルを避けるだけでなく、デジタル社会をよりよくするための行動が求められます。本研修では、情報モラル（リスク管理）とデジタルシティズンシップ（デジタル社会での責任ある関わり方）を組み合わせた指導のポイントを学び、明日からの学校現場に活かせる研修です。	(対象) 出前中堅教員サポート塾「クラウドや生成AIの効果的な活用について」に同じ ※市町村教委の要請により実施
学校等支援事業 特別支援教育基礎コンテンツ	
教育現場で役立つ知識と実践例を多数紹介しています。 (内容) 教職員や行政関係職員等が自己研修等で活用できるよう、基本的な知識や実践例など役立つ情報を各コンテンツに掲載しています。 ※自閉症、発達障害、視覚障害、知的障害、聴覚障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱、言語障害、高等学校用、幼児版の合計10コンテンツがあります。今年度は、言語障害の一部と、知的障害、肢体不自由コンテンツの改訂を行いました。	(対象) 千葉県内の教職員・行政関係職員等 (申込方法) メールによる申込み (メールアドレス) sosetokusi@chiba-c.ed.jp
ICTを活用した特別支援教育研修－病気療養の子の遠隔教育の実際－＜希望＞	
病気療養中の子供を支えている「ICTを利活用した遠隔教育」について学びませんか。 (内容) 入院生活を送りながら学ぶ幼児児童生徒の学習の充実を図るために必要な基礎的な知識と、ICTを活用した遠隔教育の実際について学び、病弱・虚弱教育の実践的な資質向上を図ります。	(対象) 幼稚園等及び小・中・義務教育・高等・中等教育・特別支援学校の教員、行政関係職員30名
高等学校における特別支援教育研修②－キャリア教育の支援－＜希望・オンライン＞	
多様な教育的ニーズのある子供たちの「自立した社会参加」について学びませんか。 (内容) 高等学校における発達障害や発達障害の疑いのある生徒へのキャリア支援の在り方について学び、特別な教育的ニーズのある児童生徒の進学・就職に向けた移行の知識を習得します。	(対象) 小・中・義務教育・高等・中等教育・特別支援学校の教員、行政関係職員40名程度
小・中・高等学校等における医療的ケア実践研修－具体的な支援と関係機関との連携の在り方－＜希望＞	
学校での医療的ケアを支える「実践と関係機関との連携」について学びませんか。 (内容) 幼稚園等、小・中・高等学校等に在籍する幼児児童生徒の医療的ケアの実際や、校内体制づくり、連携について学び、日頃の課題や実施するにあたっての不安等について協議し、教育実践に生かします。	(対象) 幼稚園等及び小・中・義務教育・高等・中等教育・特別支援学校の教員、行政関係職員のうち、医療的ケアに携わっている者、又はこれから携わろうとする者30名

【連載・県立高校の今】令和6年度 第6回 【解説と紹介】学科紹介③ 総合学科について

県教育庁企画管理部教育政策課高校改革推進室

1 はじめに

前々回より、千葉県の県立高校における「学科」について紹介してきた。

今回は、普通科、専門学科に続き、「第三の学科」とも呼ばれる総合学科について紹介したい。

第五条の分類	第六条第二項の規定
普通科（第一号）	
専門学科（第二号）	農業、工業、商業、 水産、家庭、看護、 情報、福祉、理数、 体育、（音楽）、美術、 （外国語）、国際関係、 （その他） （第一～第十五号）
総合学科（第三号）	

高等学校設置基準による分類

※ゴシックが「大学科」

※（ ）は、本県の県立高校に設置されていない大学科を表す。

2 総合学科とは

(1)幅広い選択科目

前回、前々回と紹介してきた普通科、専門学科ではその名が示すとおり、前者は国語、数学等の共通教科・科目、後者は工業、商業等に関する専門教科・科目を中心に学ぶ学科である。

一方、総合学科はこれら両者の教科・科目を幅広く選択できるようにして、生徒自らが選択して学ぶ学科である。生徒は幅広い選択

を通じて、各自の個性を生かした主体的な学習や、自己の進路希望を深める学習を実践することができる。

(2)産業社会と人間

総合学科では「産業社会と人間」という科目が必修とされている。高等学校学習指導要領総則によると、「社会生活や職業生活に必要な基本的な能力や態度及び望ましい勤労観、職業観の育成」「我が国の産業の発展とそれがもたらした社会の変化についての考察」「自己の将来の生き方や進路についての考察及び各教科・科目の履修計画の作成」等が指導のポイントとされている。

「産業社会と人間」は、原則として1年次で学び、生徒は自分の進路を自覚しながら、自分の将来について考察を深めていく。

その際、指針となるものが総合学科設置校ごとに設置されている「系列」である。

(3)系列

系列とは、生徒の進路希望などに合わせて科目を選択する目安となるよう、関連の深い科目をまとめたグループのことを指す。高等学校学習指導要領では「科目群」とも呼ばれる。本県の総合学科設置校における系列は次ページの表のとおりである。

同じ総合学科設置校でも、設置系列は学校によって異なるため、開設される選択科目も多種多様であることに注意が必要である。

続けて、本県における状況を紹介する。

3 千葉県立高校の総合学科

(1)設置状況

令和6年度現在、総合学科を設置している県立高校は全日制に7校、定時制に1校ある。

校名	設置系列
幕張総合	人文、文理、理工、芸術
船橋（定時）	健康・生活、教養・ビジネス
小金	人文社会、文理学際、数理科学、医薬医療
八街	人文、自然、情報、商業、生活
匝瑳	PEACHキャリア 国際ブリッジビルダー 360°キャリアビルダー STEMキャリア
大原	普通、園芸、海洋科学、生活福祉
安房拓心	文理、園芸、畜産、土木、調理
君津青葉	食品、農業、環境、土木、家庭・福祉、普通

千葉県立高校の総合学科設置校及び設置系列

(2)学びの内容

総合学科は、生徒が主体的に系列や科目を選択して学習できる「単位制」の学科である。普通科目と選択科目が幅広く開設されており、自分の興味・関心、進路希望に合わせた学習が可能である。

進路希望等に対応した系列の学びは、2年次から選択することになるが、定時制で唯一の総合学科を設置している船橋高校では、系列の学びは3年次から展開している。

職業系の系列設置校では、実験・実習等の体験を中心とした学びが充実しており、多くの資格取得が可能である。また、幕張総合、小金、匝瑳には、多様な進学ニーズに対応し、職業意識の高い人材を育成するため、「進学を重視した総合学科」を設置している。

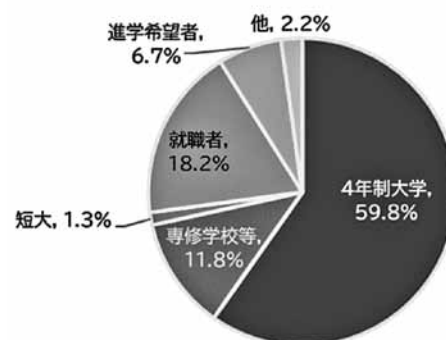
前述のとおり、総合学科では多種多様な選択科目を設置している。本県における特徴的な科目の例を一部紹介する。

設置科目例	設置校
ヨ ガ	船橋（定時）
保育基礎	幕張総合、船橋（定時）、八街、君津青葉、匝瑳、大原
林産物利用	君津青葉
畜産	安房拓心
身近な動物	八街
演劇	幕張総合
ソルフェージュ※	幕張総合、小金
マリンスポーツ	大原
測量	安房拓心、君津青葉
秘書実務	八街

設置科目例（令和6年度教育課程による）

※正しい音程で歌うなど、音楽の表現力に係る科目

4 進路状況



【出典】 令和5年度進路状況調査
(小数第二位を四捨五入)

5 おわりに

今年度、6回に渡り連載させていただいた。

後半3回の号では、学科についての制度上の特色と、本県における学びの内容と進路状況等を紹介させていただいた。

中学校における進路指導等で、適宜活用いただければ幸いである。

令和6年度調査研究事業 「特別支援教育における主体的・対話的で深い学びを 実現するためのICT機器の利活用に関する研究」

県総合教育センター特別支援教育部

1 研究の概要

文部科学省「各教科等の指導におけるICTの効果的な活用について」（令和2年9月）では、自立活動の視点にICTの活用を明記している。また、「第3次千葉県特別支援教育推進基本計画」では、障害のある子供たちのICTの効果的な利活用により、学びをどう深めるかが、喫緊の課題であるとしている。

これらを踏まえ、授業実践における自立活動の視点を踏まえたICT機器の利活用に関するモデルケースを提案することにより、教員のICT機器の利活用を推進し、幼児児童生徒の資質・能力の向上につながる教育の充実に寄与すると考え、本主題を設定した。

2 質問紙調査の実施と結果の分析

特別支援教育における自立活動の視点に着目し、ICT機器の利活用における課題を明らかにし、その課題解決の一つとして実践事例集作成の基礎資料とするため、質問紙調査を実施した。

調査結果から、ICTを利活用した教育活動への有効性を感じているものの、ICT機器を使うことへの苦手意識や、活用方法等の技術面における課題から、負担を感じていることが分かった。また、校内で相談できなかったり、研修で学んだ内容を生かしきれなかったりといった課題が上がった。

3 実践事例集（骨子案）の作成

今年度は、ICT機器の利活用のための実践事例集の骨子案を作成する。実践事例集の書式（図1）等の検討として、調査研究協力校

における実践等を行い、必要な改善を行う。なお、成果物については冊子ではなく、PDFファイルで作成し、活用を促す。PDFの利点としては、ページ内にリンクを設定することによって、実践事例集の中の興味のあるページにすぐアクセスできたり、関連する資料等をリンク先で確認できたりするなどの利便性が上げられる。

知的に障害のある児童生徒の ICT 機器利活用	
ICT 機器の利活用による学習支援① 通し番号を付ける	
★情報活用能力を支えるタイピング技能の向上	
タイピングのコツをみんなで考えながらスキルアップ！	
特性や障害を記載する 特性や障害を補う利活用を後ずタイトルを付ける ※内容 ・児童生徒への「ICT 機器の利活用について、1 ページで1つの方法を提示する。 ・提示する内容については、教育活動のあらゆる場面を想定して記載する。単発の授業場面を取り上げてもよい。 ・対象の児童生徒について、簡単に記す（校種、学年、段階等）。 ・基本的なレイアウトは示しているが、必要に応じて、多少構成を変更してかまわない。 ・本文のフォントについては、10.5 ポイントの 10 デジタル教科書体 KR-R を用いる。 ※写真・図版① ・記載例は、「写真・図版」を2枚としているが、これにとらわれない。また、それぞれの大きさも自由である。 ・見る者にとって、わかりやすい「写真・図版」を採用する。 ※写真・図版② 全体を通して、自立活動の視点を取り入れた記述を心掛ける。 ◎ICT 機器利活用のポイント① ・使用した機器やアプリ、ソフトなどを提示し、その長所を具体的に説明する。 ・ICT 機器を利活用すると、どのような教育効果があるのか、どのように効率化が図れるのかを記す。 ・初心者や機器の苦手な者が陥りやすい点について、わかりやすく記載する。 ◎ICT 機器利活用のポイント② ◎児童生徒の反応及び指導の効果 ・このメディア集を用いることによって、どのような効果が得られたのかを、児童生徒の反応と教師側の成果の両面から記載する。・課題があるならば、この欄に記載する。	

図1 実践事例集の書式（案）

4 次年度に向けて

ICT機器利活用のための実践事例集を作成することにより、ICT機器の活用を躊躇したり、指導技術に不安があったりする教員にも、ICT機器を利活用した、効果的な指導ができるようになることを考える。

次年度は、調査研究協力校における授業実践等を通して、実践事例集に様々な学校種、障害種における具体的なICT機器利活用の事例等を掲載し、県総合教育センター Web サイトにて公開する予定である。

千葉歴史の散歩道

海を望む古墳人と大寺山洞穴 —古墳を築かなかった人々—

千葉県教育庁教育振興部文化財課発掘調査班文化財主事

小此木 遼



古墳時代の墓と言え、円形や方形、鍵穴形の大きな「古墳」を思い浮かべる人が多いだろう。しかし、古墳時代に「古墳」を造らず、「ほらあな」を墓として利用した例を県内で見ることができる。

館山市の大寺山洞穴は館山湾の近くにあり、波によって削られ形成された海食洞穴であり、三つの洞穴が南側から第1～3の順で横並びに開口している。

第1洞からは、発掘調査によって、舳先を洞穴入口方向に向けた状態で、12基を超える古墳時代の丸木舟（全長3m）が発見された。丸木舟には、仕切り板等に摩耗した箇所があり、実際に使用されたものと思われる。

丸木舟とともに、人骨と副葬品が出土し、一部の丸木舟内からは、複数人の人骨が発見された。このことから丸木舟を棺として使い、洞穴を墓として利用していたことが分かった。

副葬品としては、金属製の甲冑・刀剣・鏃・耳飾り、銅製の鈴、木製の漆塗りの弓・盾、勾玉・ガラス玉等の玉類、須恵器の壺、土師器の高坏等が出土した。これらは同時代の有力者が埋葬された古墳と同等の副葬品である。

古墳時代の洞穴で、実際の丸木舟を棺として利用・埋葬したことが確認された事例は、日本列島でもこの大寺山洞穴だけである。

なお、第2・3洞からは縄文土器等が出土しており、このうち第3洞からは、縄文土器のほか、漁撈具や魚の骨、埋葬された人骨等が出土し、縄文時代から海を生活基盤とした人々が利用していたことが推測できる。

この大寺山洞穴の事例からは、古墳時代の有力者は、必ずしも立派な古墳に埋葬されたわけではないということが確認できる。

そして、海食洞穴を利用した丸木舟の棺と豪華な副葬品によって、大寺山洞穴の周辺に、海との関係の深い有力な海洋民が存在したことを教えてくれるのである。

※大寺山洞穴の関係資料については、現在、館山市立博物館等に保管されています。



写真1 第1洞入口（筆者撮影）



写真2 舟棺調査状況

千葉大学文学部考古学研究室1996『大寺山洞穴第3・4次発掘調査概報』より引用

千葉教育 桜 (No. 691) 令和7年3月13日発行

編集・発行

千葉県総合教育センター（代表）酒井 誠一

〒261-0014 千葉市美浜区若葉2-13

TEL 043-276-1204

URL <https://www.ice.or.jp/nc/>

印刷所

千葉市療育センター いずみの家

〒261-0003 千葉市美浜区高浜3-3-1

TEL 043-216-2465

令和7年度
シリーズ 現代の教育事情
特集テーマ(予定)

蓮 692号	困難を抱える児童生徒への支援
萩 693号	授業づくりを考える
菊 694号	教育の情報化で変わる学校
梅 695号	特別支援学校を核とした特別支援教育の充実
桜 696号	特色ある研修活動

「千葉教育」は千葉県総合教育センターの
Web サイトから閲覧・ダウンロードできます。

千葉教育
桜号 読者アンケート



表紙写真について
県立匝瑳高等学校 伝統を貫く匝瑳高校の弓道部

編集部からのお知らせ

令和7年度から年間発行回数を5回(現行は6回)とします。1号当たりのページ数を増やし、読者の皆様に、最新の教育情報や本県の優れた教育実践、県総合教育センターの取組等を発信する予定です。どうぞ、御期待ください。